

江戸時代における駅鈴図とその考証

川見 典久

はじめに

前号の館蔵品研究では、黒川古文化研究所が所蔵する大型銅鈴に付属する出土時の文書を紹介した「川見二〇二二」。このなかで出土品の見物に訪れた骨董好きの親類が「この鈴は珍しい古代のものであり、駅路の鈴とはこのようなものではないか」と言ったことが述べられる。駅路の鈴とは、古代の律令制下において中央と地方を往来する官使のうち、駅路上に設置された駅家にて駅馬を利用することができる駅使に支給された利用証「駅鈴」のことである。筆者は大学で日本古代史を専攻し、駅伝制に興味を持って調べた時期もあったことから、骨董趣味を有したとはいえ、学者ではないであろう江戸時代の人物にそのような知識があることに驚きを覚えた。このとき出土した三点の鈴は現地を治める紀伊徳川家に「めでたき鈴」として献上され、また国学者の本居内遠や滝野知雄らが出土の経緯や遺品の詳細を記録している。

寛政二年（一七九〇）、天明の大火により焼失した御所が再建され、光格天皇が仮御所であった聖護院から還御する遷幸行列がおこなわれた。ここに隠岐国造が所蔵する古鈴を納めた鈴印櫃が加わったことは、駅鈴に注目があつまった契機として重要であろう。この駅鈴は現在も鳥根県隠岐の玉若酢命神社に伝わっており、重要文化財に指定されている（以下、隠岐駅鈴と称する）。昭和五十一年（一九七六）に発行された二十円はがきの料額印面にデザインされていたことをご存知の方もおら

れるだろう。

このような古鈴に対する関心の背景には、江戸中期以降に高まった古の潮流がある。本誌十五号で当時研究員であった杉本欣久氏が明らかにしたように、国学者や故実家、愛石家らは鏡とともに鈴にも大きな関心を寄せ、出土・伝世した古鈴を収集するとともに、その模写図が彼らのあいだで写し伝えられていた「杉本欣久二〇一六」。そのなかには隠岐駅鈴以外にも当時駅鈴とされたさまざまな形状の鈴が含まれている。現在でも隠岐駅鈴が古代の駅鈴かどうかは諸説があり明確になっていないが、江戸時代に駅鈴と考えられていたその他の鈴については、研究者にもあまり認知されていないのではないだろうか。

そこで本稿では、隠岐駅鈴を中心に江戸時代に写し伝えられたさまざまな駅鈴の模写図とその考証を紹介し、駅鈴が注目されるに至った詳しい経緯や情報拡散の過程とそこに関わった好古家たち、そして駅鈴に対する認識の変遷を明らかにしたい。まず第一章では隠岐駅鈴が世の中に知られ、さらに寛政二年の遷幸行列で使用されることになったいきさつについて述べる。つづく第二章では江戸時代に作成されたさまざまな駅鈴の模写図を鈴の形式ごとに分類する。同じ品に複数の模写図が確認できることも多いため、その系統を整理し、模写の時期や流布のありさまを辿る。最後に第三章において、並河一敬、伊勢貞丈、栗原信充ら当時の学者による駅鈴の考証を紹介する。

なお、本稿では江戸時代の人びとが古い鈴を模写した図を「古鈴図」、なかでも当時駅鈴と認識されていたものについては「駅鈴図」と称する。また複数の古鈴図を冊子や卷子にまとめたものを「古鈴図録」と称することとする。

一 隠岐駅鈴をめぐる

(1) 隠岐駅鈴の出現

天明元年（一七八二）頃、隠岐・玉若酢命神社の神職をつとめる隠岐国造（億岐幸生）は代々伝わる駅鈴を持参して上京し、儒学の師である西依成斎（一七〇二〜九七）に披露した。並河一敬『駅鈴記』の天明元年八月付け自序には、次のようにその成り行きを記している。^①

駅鈴記

隠岐国造某は嘗て京師に來り、望楠軒西依先生の門に遊ぶ。一日其の家累世蔵する所の駅鈴一口を以て先生の觀に供し、予偶たま側に在て寓目を得る。熟じゆち是の器を惟ふに、古昔天朝典制の物にして、其の制已に断じて久し。故を以て世これを識る者稀なり。予何の幸ひ有てかこれを觀るを得る。乃ち其の形を模して以てこれを広幡内府前豊公に獻る。公、博雅好古にして、悦びてこれを珍す。遂に以て近衛准后殿下に聞え、殿下亦これを珍す。且つ其の制久しく失ふも僅かに存すを欣び、これを鑄造して後來に伝えむと欲す。是を以て内府公、一敬に命じて工を選びこれを鑄し、併せて典故を撰せしむ。一敬恭んで以て教を奉る。爾後、刀圭の余、披覽の序、聊か集めて古書数件を概見し、台教の重を報せ、且つ同好の徵考に供すと

云ふ。

天明紀元辛丑秋八月望

並河一敬記

西依成斎とともに鑑賞した並河一敬がこれを模写して内大臣・広幡前豊（一七四二〜八三）に贈ったところ、皇太后・近衛維子（一七六〇〜八三）の耳にも入り、古制を伝えるために同じものを鑄造して配布することになったという。模造した駅鈴は維子の父である近衛内前や広幡前豊のほか、公家の萩原員幹、花山院愛徳、平松時章、坊城俊親、防州徳山毛利家中の沼右内、豊前中津奥平家中の藤野彦二郎、筑後柳川立花家中の富士谷仙右衛門らに贈られた。^{②③}

なお、樋畑雪湖はこれを「億岐国造幸生筆記」から天明六年の出来事とするが「樋畑一九三九」、並河一敬の序文が天明元年付けであること、広幡前豊、近衛維子がともに天明三年で亡くなっていること、天明二年には隠岐駅鈴図の転写が確認できることから、西依成斎が駅鈴を実際に見たのは天明元年以前のはずである。

「億岐国造幸生筆記」によると、天明五年初冬、隠岐国造幸生は叙位のため駅鈴を携えて再び上京した。叙位は翌年四月六日に行われ、幸生へ従五位下隠岐臣が与えられた「隠岐島誌編纂係一九三三」。六月には前大納言・日野資枝（一七三七〜一八〇一）の要請により駅鈴を披露し、さらに光格天皇の勅覧を得たという。

京都の医師・橋南谿（一七五三〜一八〇五）も『北窓瑣談』にこの駅鈴を見たことを記しており、没後の文政十二年（一八二九）刊行本には歌人として知られる村田嘉言による挿絵が入る（図1）。

隠岐国造の家に、昔より伝へ持てる駅路の鈴あり。国造在京の時、

余も親しく交りしかば其鈴をも見たり。平に四角にて、隠々として八角の稜あり。下の方に音穴長く、普通のごとし。平面に駅鈴の二字有。銅の古色愛すべし。実に数千年の物なり。其音清亮、殊更に音高くしてよく遠く聞ゆ。国造名は幸成、姓無く、官位無く、神孫にて、神代より今に相続せり。詩歌をも好みて、交広き人なりき。

「銅の古色愛すべし」「実に数千年の物なり」とあることから、古代に使用された駅鈴そのものと捉えたようで、「其音清亮、殊更に音高くしてよく遠く聞ゆ」と、実際に音色も確かめたことがわかる。隠岐国造について「姓無く、官位無く」とすることから、天明六年の叙位以前の出来事と推測され、西依成斎らと同時期に実見したのかもしれない。

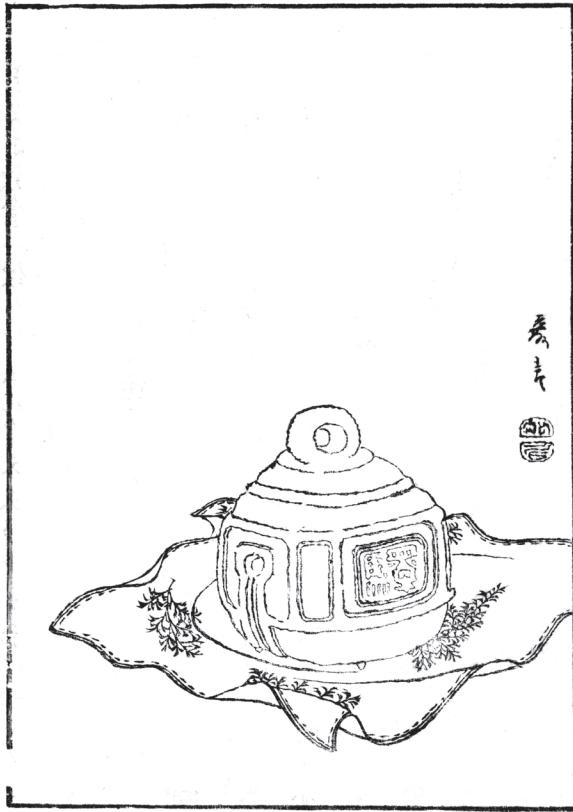


図1 隠岐駅鈴図(『北窓瑣談』国文学研究資料館)

(2) 寛政二年の遷幸行列

天明八年正月三十日の夜明け前、京都の中心部で火災が起こり、夜には御所にも火の手が及んだ(天明の大火)。南門から出て下鴨神社へ難を避けた光格天皇は、その後、聖護院へ移ってここを仮御所とした(『光格天皇実録』)。

焼失した御所の再建にあたっては、紫宸殿および清涼殿を平安時代の旧制にもとづく復古様式とすることが朝廷側から要望された。財政的な事情から質素な造営にとどめたい幕府側では、老中松平定信を総奉行として上京させ、朝廷側との折衝をおこなった。以後のやりとりで減坪などもありながら、最終的には光格天皇が求めた復古的な内裏造営の構想が実現することになる[藤田一九九四・一九九九・二〇一八]。

この復古内裏の根拠となったもののひとつが、裏松固禪による『大内裏図考証』であった。裏松固禪(一七三六〜一八〇四)は、宝暦八年(一七五八)におこった宝暦事件による謹慎中の明和二年(一七六五・六六)頃から、高橋宗直(一七〇三〜八五)による紫宸殿および清涼殿の作図と考証に触発されて平安宮全体の考証を開始し、天明三・四年から七年頃までの期間に稿本の作成を完了したと考えられている[詫間二〇〇三]。また固禪は遷幸当日の手順について古代・中世の諸史料から規定や実例を集めた『新造内裏遷幸次第』も記している。

寛政二年六月、天皇の叔父にあたる鷹司輔平より隠岐国造に対して駅鈴を持参して上京するように命令があった。仮御所である聖護院から再建された新御所への光格天皇の遷幸行列に駅鈴を納めた鈴櫃を加えるためである。遷幸行列はこの年の十一月二十二日辰刻(午前八時頃)前に聖護院を出発した。国立公文書館内閣文庫の『寛政御遷幸之記』および柳原均光『日次記』によるとその道筋を次の通りであった[伊藤

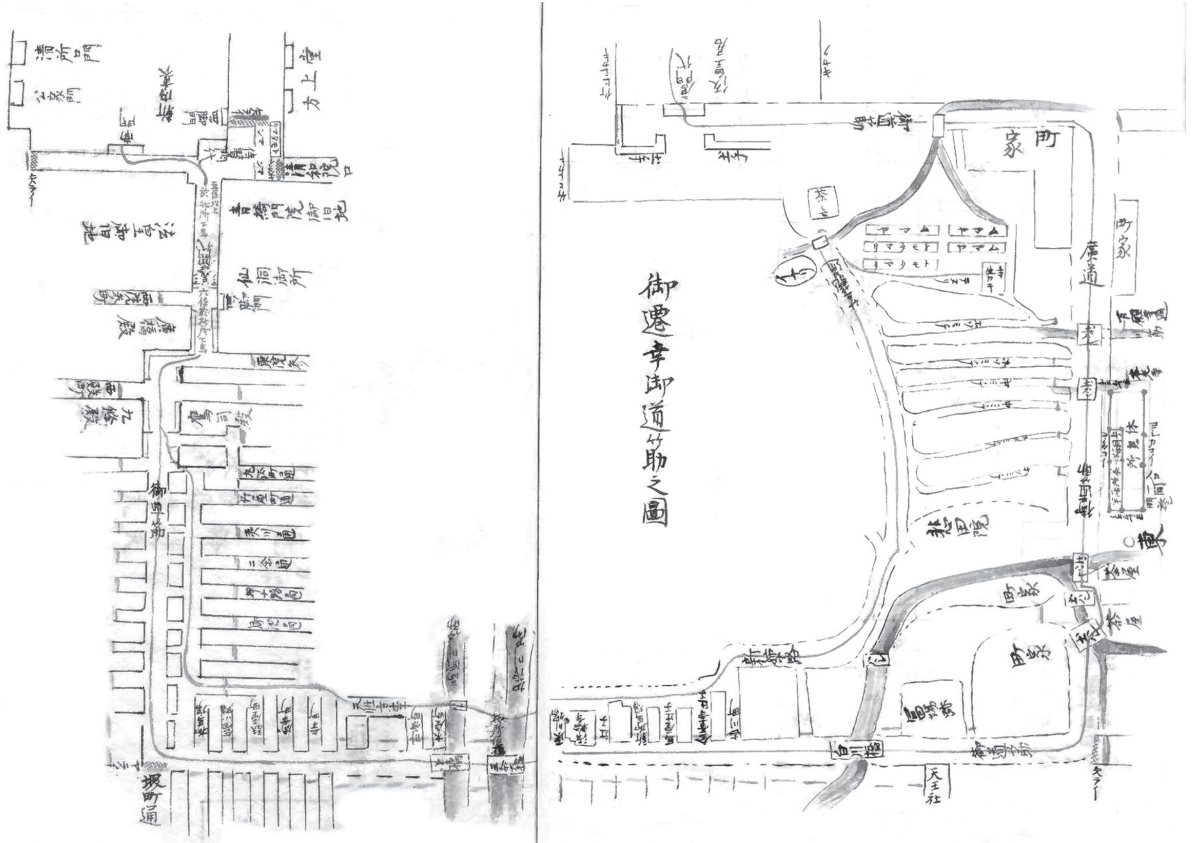


図2 御遷幸御道筋之図(『京都御遷幸之記』国立公文書館内閣文庫)

二〇一七、野村二〇一七、所二〇一七b」。

御道筋ハ聖護院より黒谷街道を南へ、三条を西へ、境町を北へ、御築地の内凝華洞の東の方の広小路を西へ、直ちに南門へ入御まします。中にも黒谷街道ハ田間ニある牛馬道なれハ、新に地形を清められ、左右へ一間ツノ道を開き、径六七間程の広道と成、矢来を両側に結ぶ。其外三条の橋造り替られ、小路ハ民家の床を土間と等しく切下て、京洛の老若緇主等ハ云ニ不及、浦安四隅の洲々津々浦々の者迄も伝へ聞て、一天の君の御幸拜まんと千里を遠とせず、海山を越て洛ニ来るもの幾千万そや。(『寛政御遷幸之記』)

春日小路を東へ行き、鳥居大路を南へ行き、三条大路を西へ行き、万里小路を北へ行き、美福門代をへて建礼・承明等の門より入御したまふ。(柳原均光『日記記』)

国立公文書館内閣文庫『京都御遷幸之記』(文化元年(一八〇四)八月、天保十三年(一八四二)北川政武写)に掲載される「御遷幸御道筋之図」(図2)を参照しつこの道筋を辿ると、聖護院の仮御所を出発した行列はまず御所とは反対方向の東へ向かい、現在の岡崎通り(黒谷街道・鳥居大路)を南に進む。この道は田地に囲まれた牛馬道であったが、左右へ一間半ずつ道幅を広げて清め、両側には矢来(竹や木材を組んだ仮柵)を立てたという。その後、三条通りを西へ、堺町通りを北へ折れる。正午頃、天皇を乗せた鳳輦は新御所の建礼門に到着した。遷幸にあたっては三条大橋が架け替えられたほか、民家の床を土間の高さまで切り下げたという。江戸時代に天皇の行幸は珍しく、ひとめその行列

家ごとに駅馬や案内役の駅子の提供を受け、これを持ち継いで往来した。天平宝字元年（七五七）に施行された養老公式令の給駅伝馬条に、

凡そ駅伝馬を給はむことは皆鈴伝符の尅数に依れ（事速ならば一日に十駅以上、事緩くは八駅、還らむ日に事緩くは六駅以下）。親王及び一位に駅鈴十尅、伝符卅尅。三位以上に駅鈴八尅、伝符廿尅。四位に駅鈴六尅、伝符十二尅。五位に駅鈴五尅、伝符十尅。八位以上に駅鈴三尅、伝符四尅。初位以下に駅鈴二尅、伝符三尅。皆数の外に別に駅子一人を給へ。

とあるように、駅鈴は彼らが駅馬の支給を受ける際の利用証であった。なお、当時の公的な交通手段の提供システムは駅と伝の二重構造になっており、郡司が管轄する伝馬を利用する場合の利用証が伝符である。これらの利用は位階に応じて支給される駅鈴・伝符の「尅」数に従うことになっていた。

同じく諸国給鈴条には、

凡そ諸国に鈴を給はむことは、大宰府に廿口、三関及び陸奥国に各四口、大上国に三口、中下国に二口、其の三関国には各関契二枚を給へ。

とあり、駅鈴は大宰府に二十口、鈴鹿・不破・愛発の三関があった伊勢・美濃・越前の三国と陸奥国には四口、その他は大・上国に三口、中下国に二口が支給される規定であった。隱岐国は下国にあたり（『延喜式』）、二口が支給されたことになる。『続日本紀』には実際に駅鈴・伝符を配備した記事があり、大宝律令下では次のような例がみえる。

・慶雲二年（七〇五）四月辛未

大宰府に飛駅の鈴八口、伝符十枚を給ふ。長門国には鈴二口。

・養老四年（七二〇）三月乙亥

按察使京に向ふ及び属国を巡行するの日は、伝に乗り食を給ふ。因て常陸国に十尅、遠江国に七、伊豆・出雲の二国に鈴各一つを給ふ。

・同年五月乙亥

伊豆・駿河・伯耆の国に三尅の鈴各一つを給ふ。

・天平四年（七三二）九月丁卯

諸道の節度使の請に依て駅鈴各二口を充つ。

また養老律令施行後にも次の例がある。

・天平宝字二年九月丁酉

始めて越前・越中・佐渡・出雲・石見・伊予等の六国に飛駅の鈴を頒つ。国ごとに一口なり。

養老職員令太政官条に「少納言三人（小事を奏宣し、鈴印伝符を請進し、飛駅函鈴を進付し、兼て官印を監ることを掌る。其少納言は侍従の員内に在り。）」、同中務省条に「大主鈴二人（鈴印伝符・飛駅函鈴を出納することを掌る。）、少主鈴二人（掌ること大主鈴に同じ。）」とあり、中央において駅鈴は伝符や印、飛駅函鈴とともに少納言と中務省の主鈴（大主鈴・少主鈴）が管轄した。九世紀後半に編纂されたとされる『儀式』

飛駅儀によれば、緊急事態において中央から飛駅が発遣される手続きは以下のようになっている「森一九九五・二〇一九」。

- 1 少納言に命じられて主鈴が勅符を飛駅函に入れ、糸と松脂で封じる。
- 2 中務省の内記が飛駅函の上部に「賜某国」、封緘に「封」、その右下に「飛駅」、左下に「月日時刻」を書す。飛駅函を入れる革袋に付ける短籍にも「賜某国飛駅函」「年月日時刻」を書す。函の左に「副官符若干通」と記す。
- 3 主鈴が飛駅函と太政官符を革袋に収め、革袋に短籍を取り付ける。少納言が革袋を持ち、封じたことを大臣に報告する。大臣は「鈴を取れ」と宣し、少納言は称唯して革袋を中務輔に授け、主鈴に鈴を出させる。
- 4 中務輔は革袋を少納言に渡して退出する。少納言は主鈴に鈴を革袋に取り付けさせ、その旨を大臣に申す。大臣は「某国へ賜へ」と宣す。
- 5 少納言が称唯して主鈴の名を唱えると主鈴は称唯して進み、少納言は「某国へ賜ふ飛駅函給へ」と云う。主鈴は称唯して革袋に入った飛駅函を受け取り、鈴を鳴らしながら走り出る。
- 6 閤門外に待機していた馬部一人は鈴声を聞くと乗馬して待つ。
- 7 主鈴は馬部の姓名を問うたうえで「某国に遣はす飛駅函給へ」と告げ、馬部は称唯して飛駅函を受け取る。主鈴は馬部に「詣る所の駅」を問い、馬部が「某路より行き某駅に詣る」と返答し、発遣される。

勅符を納めた飛駅函は太政官符とともに革袋に入れ、これに短籍（短冊、木簡）と鈴を取り付けることになっている。この鈴が駅鈴とみられる。

養老公式令車駕巡幸条には、

凡そ車駕巡幸せむ、京師留守官には鈴契を給へ。多少は臨時に量て給へ。

とあり、天皇が行幸する際には不在の都を預かる留守官（多くは皇太子がその任にあたる）に駅鈴・関契を与える規定となっている。天平十六年閏正月乙亥に聖武天皇が恭仁宮から難波宮へと行幸した際、二月乙未に「少納言従五位上茨田王を恭仁宮に遣して、駅鈴・内外印を取らしむ」とあり、丙申に「中納言従三位巨勢朝臣奈弓麻呂、留守官に給へる鈴印を持ちて難波宮に詣る」とあることから（『続日本紀』）、規定の通り、留守官が駅鈴を預かっていたとわかる。翌年に難波に行幸した際も「天皇不与なり。平城恭仁の留守に勅して、宮中を固守せしむ。悉く孫王等を追して難波宮に詣らしめ、使を遣して平城宮の鈴印を取らしむ。」（天平十七年九月癸酉条）とあり、平城宮の留守官から駅鈴を取り寄せている。

しかし、延喜主鈴式を見ると、行幸の際、内印と駅鈴・伝符は天皇とともに移動することになっており、十世紀のはじめには行幸に駅鈴を携行するように変化した可能性が高い。

凡そ行幸、賀に従う内印并に駅鈴・伝符等、皆漆籠子に納め、主鈴、少納言と共に預り供奉す。其の駄は左右馬寮之を充つ。

駅制ならびに駅鈴はいつごろ成立したのだろうか。『古事記』崇神天皇に「駅使を四方に班ちて意富多泥古と謂ふ人を求めたまひし時」とあるのが「駅使」の史料上の初見であり、以後、記紀に駅使や駅馬、馳駅の語が散見するものの、律令駅制との関わりは不明と言わざるをえない。ただ、日本が参考にした唐の制度における郵駅の利用証は、割符である「伝符」（銅龍伝符）または紙券であり「荒川二〇〇〇」、駅鈴が用いられることはなかった。鈴を利用証とする慣習が唐制の導入以前にさかのぼる可能性は少なくない。

『日本書紀』孝徳天皇の大化二年（六四六）正月に出されたいわゆる大化改新詔の二に「畿内国司・郡司・関塞・斥候・防人・駅馬・伝馬を置き、鈴契を造り、山河を定めよ」とあり、駅伝馬の設置ならびに駅鈴の造作が含まれる。これがただちに実行されたのかは疑問であるものの、「即ち大分君恵尺・黄書造大伴・逢臣志摩を留守司高坂王のもとに遣して、駅鈴を乞はしめたまふ」（天武天皇元年〈六七二〉六月甲申条）と、壬申の乱において天武天皇は美濃国へ派遣した村国連男依らを呼び戻すために駅馬を利用しようとした。結果的に留守官をつとめる高坂王に駅鈴の支給を拒否されるのだが、この頃にはすでに駅馬とその利用証である駅鈴が成立していたであろう。乱後には「即ち將軍（大伴）吹負、難波の小郡に留りて、以西の諸国司等に仰せて、官鑰・駅鈴・伝印を進らしむ」と、諸国から駅鈴の回収を命じる記事もみえる。

それでは駅鈴はいつまで用いられただろうか。十世紀末になると、唐人の漂着、大規模な戦闘行為や災害が起こっても飛駅が発遣されなくなり、奉幣使などそれまで駅使であった使者も路次の国々で供給にあずかるための官符や牒を発遣のたびに給わる給食馬使に変化するなど、このころには律令駅制が衰退したとみられている「坂本一九二八」。『百練

抄』治承四年（一一八〇）十二月二日条に「東国追討使左兵衛督知盛已下発向す。駅鈴・節刀は給はず」とあり、治承・寿永の乱において蜂起した近江源氏や園城寺の僧兵を追討するため発遣された平知盛らに対しては、駅鈴も節刀も支給されなかったという。

現地で駅伝馬を徴発することのできる駅鈴・伝符は、律令制下において内外印（天皇御璽・太政官印）や將軍に与えられる節刀などと並んで重要視され、皇位の継承にもなつて受け継がれた。ただし、これらの資料からは利用できる駅馬の数を示す「尅」（きざみと考えられている）がある鈴であるほかは、実はこのような形状であったか詳らかでない。承久三年（一二二一）成立の順徳天皇撰『禁秘抄』大刀契条に、

鈴印、同記（匡房記）に俊実・通俊曰く、件の鈴太はだ興有る物也。或は六角、或は八角と云々、已上。上古少納言之を伺ひ見るか。

とあり、大江匡房（一〇四一〜一一一一）による匡房記（江記）にみえる源俊実と藤原通俊の見解から、駅鈴を六角形あるいは八角形とする。ただし書きぶりは曖昧で、当時すでに駅鈴の実物に接することができなかった可能性が高い。

七世紀半ばに駅制が創始されたとすれば、駅鈴は飛鳥時代後期の様式で製作された鈴ということになる。淵源がさらにさかのぼるのであれば、古墳時代の大型銅鈴と駅鈴を結び付けた骨董好きの推論もあながち的外れとは言えない。ただ、度重なる内裏焼亡によって作り替えられている可能性もあり、そうすると常に同じ形式で製作されるとは限らない。このような文献からわかる前提を踏まえつつ、次章では江戸時代に駅鈴と考えられていた鈴について模写図の整理から検討を加える。

二 江戸時代の駅鈴図

樋畑雪湖は駅鈴として伝来するものを八稜鈴、六稜鈴、鬼面鈴、垂葉式駅鈴、楕円駅鈴、千鳥式駅鈴、環鈴の七種類に分類した「樋畑一九三九」。本稿では基本的にこの分類を踏襲し、(1)八稜鈴、(2)六稜鈴、(3)三站鏡(鬼面鈴)、(4)環鈴、(5)水滴形鈴(垂葉式駅鈴)の五種類に分類し、それぞれの鈴に①から⑰の通し番号を振った。ただし、樋畑氏が楕円駅鈴、千鳥式駅鈴に分類した鈴は、江戸時代に駅鈴と明記した資料を見出すことができなかった。それぞれ(6)楕円形鈴、(7)鳥形鈴として知り得た情報を書き残しておくことにする。

なお、本稿では古鈴図録のうち複写を入手できたもの、またはインターネット上で閲覧可能なものを用いる。表1には古鈴図録の名称、所蔵者、備考として書写した人物や印記を掲げるとともに、これから取り上げるどの駅鈴図が収録されているのかをまとめた。適宜参照いただきたい。

(1) 八稜鈴

① 隠岐駅鈴

現在、隠岐には下面にある突起が三点のもの(甲)と四点のもの(乙)の二つ駅鈴があり、ともに現在、「隠岐国駅鈴」として国の重要文化財に指定されている(億岐家宝物館保管)。それぞれの法量は次の通りである⁵⁾。「億岐一九六九」。

| | | | | |
|-----|--------|--------|--------|-------|
| 【甲】 | 高八・五cm | 幅六・七cm | 厚五・二cm | 重七七〇g |
| 【乙】 | 高八・五cm | 幅六・七cm | 厚四・九cm | 重七〇〇g |

両者は上下から見て横長の八角形になるよう作る。胴部の八面はそれぞれ輪郭で縁取り、長辺にあたる表裏の二面にはひとまわり小さな輪郭の中に篆書により「駅」「鈴」の字をあらわす。なお、本稿では「駅」字のある方を正面、「鈴」字のある方を背面とする。頂部には環状の鈕をつけ、円形の孔をあける。鈕の周囲および胴部とのほぼなかほどに突帯を巡らせる。丸くふくらむように作った下部には横方向に切れ目をつけて鈴口とし、鈴口をはさむように甲は三つ、乙は四つの突起を作る。鈴口は左右両側面のなかほどに及び、端を円形に穿つ。輪郭を突帯とし、端部は宝珠形とする。

樋畑氏は『好古小録』『集古十種』『柳庵雑筆』などに本品の図が掲載されていることを述べ、「諸本の模写拙劣にして真を伝へず」という「樋畑一九三九」。また隠岐駅鈴を偽作としりぞけた伊勢貞丈の説に対しては、「貞丈はその真物を見ずして漫に伝写による拙劣な図のみにより、この断を敢てしたものらしく」とするなど、江戸時代における模写図の出来が悪いことを主張する。

しかし、江戸時代に作成された古鈴図録に収められた隠岐駅鈴図を見ると、いくつかの種類があつてそれぞれ正確の度合いが異なっている。原図の作成およびそこから転写をおこなった時期や人物についての注記から、その前後関係がある程度明らかになる。さらに、同じ図がいくつかの古鈴図録に収録されており、その比較から原図への追記や誤写などもある程度は推測できる。以下、これらを図の作成者、または図をもたらしした人物ごとに分類して、模写図の特徴や作成された経緯、状況について整理しておく。

| ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ | ⑫ | ⑬ | ⑭ | ⑮ | ⑯ | ⑰ |
|-------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---------|-------|---|---|---|---|---|
| ?*2 | | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | | |
| C | | | | | ○ | | | | | A | A B | | | | | |
| C | | | | | | | | ○ | | H | | | | | | |
| C | ○ | | | | ○ | ○ | | ○ | | A E I | C | | | | | |
| C | | | | | | | | ○ | | | | | | | | |
| B C | ○ | | | | ○ | ○ | | ○ | | A B | A B | | | | | |
| C*3 | | | | ○ | ○ | | | | | A F | A | | | | | |
| B C | ○ | | | | ○ | ○ | | ○ | | A B | A B | | | | | |
| C | | | | | ○ | | | | | A F | A | | | | | |
| C | ○ | | ○ | | | ○ | | | | A B D | A B | | | | | |
| C | | | | ○ | ○ | | | | | A F | A | | | | | |
| C | | | | | ○ | | | | | A | A | | | | | |
| C D E | | | | ○ | ○ | | | | | A C | A | ○ | | | | |
| C | | | | | ○ | | | | | A (?) | A | | | | | |
| C | | | | | ○ | | | | | A (?) | A | | | | | |
| C D E | | | | ○ | ○ | | | ○ | | A C | A | ○ | | | | |
| C | ○ | | | | ○ | ○ | | ○ | | | A B*4 | | | | | |
| B C | | | | | ○ | ○ | | | | A D (?) | A B | | | ○ | | |
| | | | | | | | | | | B (?) I | 拓 | | | | | |
| B | | | | | ○ | | | ○ | | A | A | | | | | |

*3 落丁により一部のみ収録。

*4 Bは側面図のみ収録。

表1 古鈴図録一覧

| No. | 名称 | 所蔵 | 備考 |
|-----|------------|----------------|------------------------------|
| 1 | 古物鈴之図 | 朝日町歴史博物館 | 印記「椎本文庫」(橘守部旧蔵) |
| 2 | 古鈴鐸図 | 大洲市立図書館 矢野文庫 | 坂田諸遠写、 文久2年静屋主人(渡辺吾兄)録 |
| 3 | 古鈴之図 | 京都大学総合図書館 | 小野貞潔本写シカ |
| 4 | 駅鈴記 ※1 | 京都大学文学研究科図書館 | 印記「雑司谷片山賢」 |
| 5 | 古駅鈴図及古来鈴之図 | 国立公文書館 内閣文庫 | 『催馬楽奇談』所載古鈴図写シカ |
| 6 | 古鈴之図 | 国立国会図書館 | 弘化4年渡辺勝延写 (鈴木甘井本写し) |
| 7 | 古鈴図 | 国立国会図書館 | 胃山文庫(根岸友山・武香旧蔵) 錯簡・落丁あり |
| 8 | 古鈴之図 | 神宮文庫 | 文化8年鈴木甘井 |
| 9 | 古鈴集図 | 静嘉堂文庫 | 寛政12年斎藤幸孝 |
| 10 | 鈴図集 | 東京国立博物館 | 柳庵用箋、印記「栗原家蔵」 |
| 11 | 古鈴図巻 | 天理大学附属天理図書館 | 清野謙次旧蔵 |
| 12 | 古鈴図 | 天理大学附属天理図書館 | 印記「大田氏蔵書」「南畝文庫」 清野謙次旧蔵 |
| 13 | 古鈴図 全 | 新潟大学附属図書館 佐野文庫 | 享和2年草野直礼蔵本より戸田直考写 |
| 14 | 駅路鈴真形図 | 西尾市岩瀬文庫 | 印記「銘誠」 |
| 15 | 古駅鈴図考 | 西尾市岩瀬文庫 | 印記「平氏文庫」「鋏兜」「田頼輔印」 沼田頼輔旧蔵 |
| 16 | 駅路鈴之図 | 西尾市岩瀬文庫 | 文政12年忌部保高、明治32年沼田瓶堂写 |
| 17 | 駅鈴考 草本 | 西尾市岩瀬文庫 | 文化12年栗原信充 |
| 18 | 駅路鈴考 ※1 | 西尾市岩瀬文庫 | 寛政7年小沢含章写 (印記「足水家蔵」を写す) |
| 19 | 駅鈴図 | 西尾市岩瀬文庫 | |
| 20 | 古鈴図 | 松浦武四郎記念館 | 天保3年松浦武四郎 |

※1 『駅鈴記』(並河一敬)、『駅路鈴考』(伊勢貞丈)写本に付属する古鈴図録について記す。

※2 ?は系統不明、(?)は系統推定を示す。

驛鈴圖

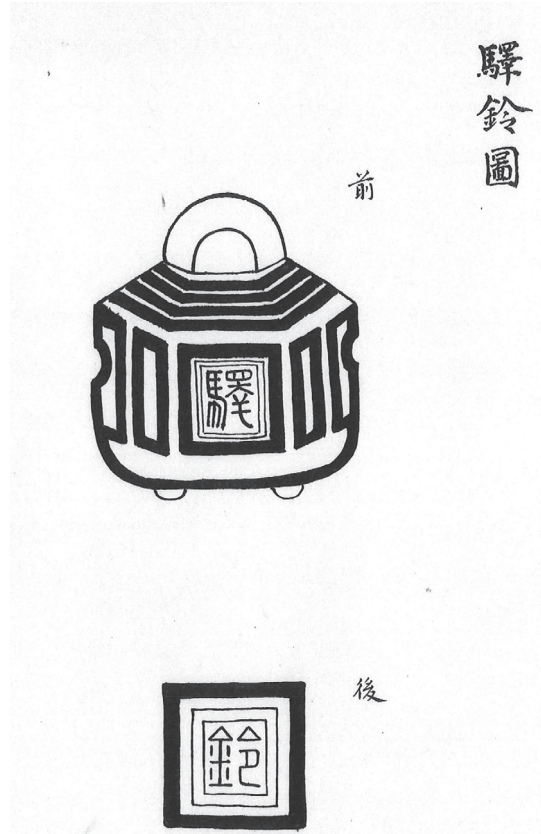


図4 隠岐驛鈴図A (『驛鈴記』京都大学文学研究科)

驛鈴圖



図5 隠岐驛鈴図B (『驛鈴考』西尾市岩瀬文庫)

A 並河一敬 a

並河一敬の『驛鈴記』(天明元年八月序)には、序文に続いて「驛鈴図」として隠岐驛鈴の図を掲載する(図4)。正面からの全図(「前」と背面の「鈴」字(後))を描く。転写本で見える限りでは、上部の突帯や胴部の輪郭の表現が不正確である。序文にある広幡前豊に見せた図がこれと同じであったかどうかは定かではない。

B 並河一敬 b

「驛鈴図 隠岐国造傳來 洛下并河一敬写 天明二年壬寅三月」「近衛准三宮内前公、広幡前内府前豊公、御求メニ付新鑄ヲ獻上ス」との注記を有する(図5)。正面、背面、側面と三方向からの全図を載せ、「驛」字の寸法と鈴中の「丸」を図示する。鈕が宝珠形となり、本体も一見すると八角形とはわからない描写である。Aとは異なる図であるが、やはり正確性は欠いている。

C 村井古巖

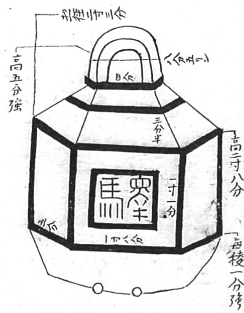
「壬寅正月十一日 西依先生携観 勤思堂邑井敬義蔵」とある。村井古巖(一七四一〜八六)は名を敬義、通称を菱屋新兵衛といい、古巖、勤思堂と号した。京都で呉服商を営むかたわら書籍に強い関心を有した蔵書家として知られ、天明四年には伊勢内宮の林崎文庫に和書を奉納し、これが現在の神宮文庫にまで引き継がれている。

本図は天明二年正月十一日に西依成斎が携えて来た驛鈴(またはその模本)を村井古巖が写したもので、正面全図、背面「鈴」字、側面全図、下面全図とともに、胴部八面の展開図(引延之図)があらわされるのが大きな特徴である(図6)。側面の図は上部の突帯が一本多く、天理図

書館『古鈴図巻』には「側面図行一横画正面図為正」、西尾市岩瀬文庫『駅路鈴真形図』および『古駅鈴図考』には「鈴之筋有右者二、有左三者不知孰是非、得再図可改正之」と注する。京都大学総合図書館『古鈴之図』は上の二本が鈕に近接して引かれており、もとは鈕周囲にある一筋の突帯をあらわしていたものが二本に写し崩れた可能性もある。鈴口端部の輪郭が宝珠形でなく円形になる写本は転写の誤りとみられ、形状

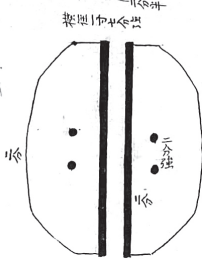
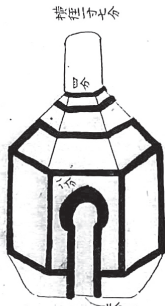
驛鈴圖

隱岐國造家藏驛鈴圖



裏之方

引延之圖原本有誤今補之



此圖當爲中玉
大ヤカ此

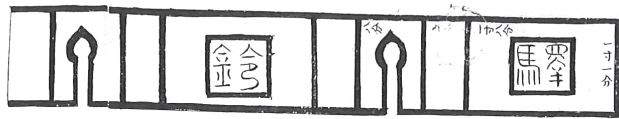
鈴上ノ物若キ直ニ左者有ニ
下知非矣得再圖可改正之

唐銅ヲ以作之惣重キ

壬寅正月十日

西依先生携觀

勤忠堂邑井敬義藏



星猿ヲ以招之
文字縁トモリキ
フケシ

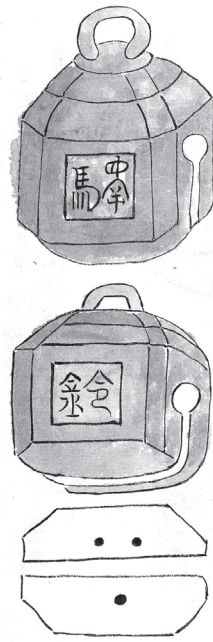
や輪郭の突帯の構成など、もとはかなり正確に記された図であると推測される。原図を描いた人物は不明ながら、A Bと比較する限りでは並河一敬ではないと考える。また、下面に四つの突起をあらわすことから、乙鈴を描いたとわかる。
今回取り上げる模写図のなかでは最も詳しく、そのためか最も流布したと考えられる図である。静嘉堂文庫が所蔵する斎藤幸孝『古鈴集図』に収められた「隱岐国造家藏同物（駅路鈴）」図は、植田勝賢の蔵本を借り受けた多賀常政が天明三年十月に転写している「杉本欣久二〇一六」。また、天理図書館『古鈴図巻』の図は、植田勝賢から天明四年に藤義繁、藤嵩高へと写し伝えられており、短期間の間にこの図が流布した様子が見て取れる。

図6 隱岐駅鈴図C (『古鈴図』天理大学附属天理図書館)

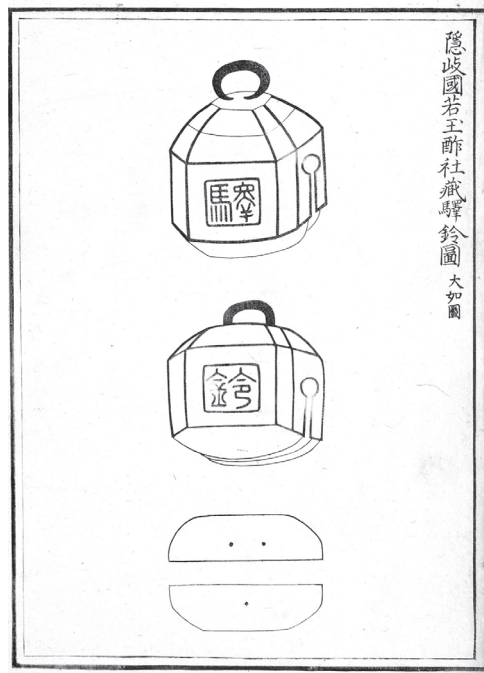
D 辻蘭室

新潟大学佐野文庫『古鈴図』および西尾市岩瀬文庫『駅路鈴之図』に「寛政四年七月廿五日辻信濃守ヨリ写来ル 喜(嘉)樹」の注記

隱岐國周吉郡玉砦酢神社 土人惣名大明神ト云



大サ如圖地金ハカラカ子サハリノ類也
寛政四年七月廿五日辻信濃守ヨリ寫來ル
喜樹



隱岐國若玉酢社藏驛鈴圖 大如圖

図9 隱岐駅鈴圖(『集古十種』国立国会図書館) 図7 隱岐駅鈴圖D(『古鈴圖』新潟大学佐野文庫)

を有する図が掲載され、辻信濃守から大塚嘉樹(蒼梧)にもたらされた模写図であるとわかる(図7)。辻信濃守(一七五六〜一八三六)は名を章従、字を為槻または克成といい、蘭室、孜軒と号した。撰関家に次ぐ清華家のひとつ久我家に仕える一方、蘭語を研究した人物として知られる「山本一九六六」。大塚嘉樹(一七三一〜一八〇三)は字を子敏、敏卿、

驛鈴 隱岐國若玉酢社所得

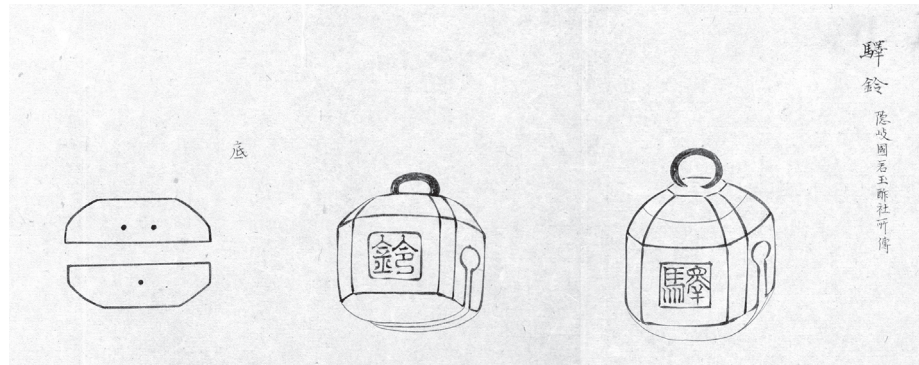


図8 隱岐駅鈴圖(『集古図』国立国会図書館)

通称を市郎右衛門といい、蒼梧、茅園、駿岳などと号した有職故実家である。なお、宮中で駅鈴の事を掌る主鈴の役職を代々つとめた地下官人・渡辺家には、辻蘭室と蘭学者・宇田川榕菴(一七九八〜一八四六)の手になる「彩色ジャワ植物図譜」が伝わっていたことが指摘されている「松田・益満二〇一九」。当時主鈴であった渡辺珍之と辻信濃守に個人的なつながりがあった可能性が高く興味深い。

本図は斜め上から見た正面全図、斜め下から見た背面全図、下部全図からなり、「大サ如図、地金ハカラカ子(唐金)サハリ(佐波理)ノ類也」と注記がある。鈕の形状や下部の輪郭が正確性を欠き、突帯も略される。下面の突起は三つであるから、これは甲鈴を描いたものとわかる。

藤貞幹『集古図』掲載の一図(図8)や松平定信が編纂させた『集古十種』収録の「隱岐國若玉酢社藏駅鈴圖」(図9)はこの系統の駅鈴圖を写したものである。樋畑氏は拙劣な駅鈴圖のひとつとして貞幹『好古小録』(寛政六年序)を挙げるが、駅鈴の項はあるものの模写図の掲載はなく、『集古図』の誤りとみられる。『好古小録』には隱岐駅鈴について次のように記している。

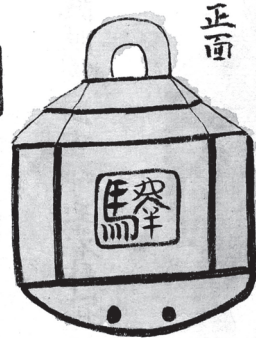
駅鈴

隱岐國若玉酢神社伝る所八稜の駅鈴一口古製考ふべし。実に希世の珍也。六稜の鈴梨木三位の摹本世に伝はる。何の所に存して摸せし

にや、摸本に其伝ふる所を記さず。駅鈴の二篆字八稜の書に勝る。

隠岐駅鈴は古製を考えるうえで重要な品であるとしつつ、摸本として伝わる六稜鈴（後述）の「駅鈴」字の方が篆書としては優れているとする。なお、『好古小録』と『集古十種』は本来「玉若酢」とすべきところをどちらも「若玉酢」とする誤りをおかしている。『集古十種』のうち最初に刷られたとみられる寛政十二年の序文を有する『集古十種稿』には隠岐駅鈴は収録されておらず、のちに増補改訂された際、貞幹『集古図』と『好古小録』を参考にした可能性が高い「川見二〇一八」。ちなみに『好

億伎国造傳來家藏



正面



裏ノ字



側面



断中玉

寛政七年春隠岐国造幸生自ら摸與古川子曜子曜直直與之高橋真末余借之真末而騰馬焉時國造來于江府以此鈴入台路見

源義徳識

図10 隠岐駅鈴図E（『古鈴図』新潟大学佐野文庫）

古小録』下巻末の図録には蓋表に「駅伝 太宰府」と書かれた「駅伝古函」の図が掲載される。

E 古川古松軒

新潟大学佐野文庫『古鈴図』および西尾市岩瀬文庫『駅路鈴之図』には、「億伎国造傳來家藏」として正面と側面の全図、「鈴」字、丸の図からなる隠岐駅鈴図も掲載される（図10）。細部は省略して表現するもの、およびその形状は正確に描かれている。源義徳という人物による識語から模写された経緯がわかる。

寛政七年春、隠岐国造幸生、自ら摸して古川子曜に与ふ。子曜直ちにこれを高橋真末に与へ、余これを真末に借りて贍写す。時に国造、江府に來り此鈴を以て台覽に入る。 源義徳識

寛政七年の春、隠岐国造幸生が自ら模写したものを古川古松軒に贈り、古松軒から高橋真末（狩谷掖斎）へと与えられたもので、このとき隠岐国造は駅鈴を將軍家齊の台覽に入れるため江戸に滞在中であったという。古川古松軒（一七二六〜一八〇七）は名を正辰、字を子曜、通称を平治兵衛といい、竹亭、黄薇主人とも号した。備中国下道郡岡田の出身で、『西遊雜記』、『東遊雜記』などの紀行文を著した人物である。寛政五年に幕府の要請を受けて江戸へ赴き、武蔵国の地誌編纂の任にあたった。翌年には帰国が許されたが、寛政七年の春にはいまだ江戸に留まっていたのであろう。

狩谷掖斎（一七七五〜一八三五）は名をはじめは真末あるいは真秀、のちに望之、字を卿雲、通称を三右衛門といい、掖斎、求古楼と号した

考証学者である。江戸下谷池之端の書肆青裳堂・高橋高敏の子として生まれ、二十五歳の時、親類にあたる弘前藩御用達の米屋津軽屋・狩谷家の養子となった。経営のかたわら、金石文、貨幣、度量衡などについて研究し、『本朝度量権衡考』、『古京遺文』などを著した。

源義徳（生没年未詳）は文政七年に光格上皇のため將軍家齊の援助により修理された修学院離宮の普請役であった人物で、役目の間に執筆した宮内庁書陵部蔵『修学院御幸記』が伝わる。

宮内庁書陵部が所蔵する『隠岐国造駅路鈴由緒書』は隠岐国造の家系

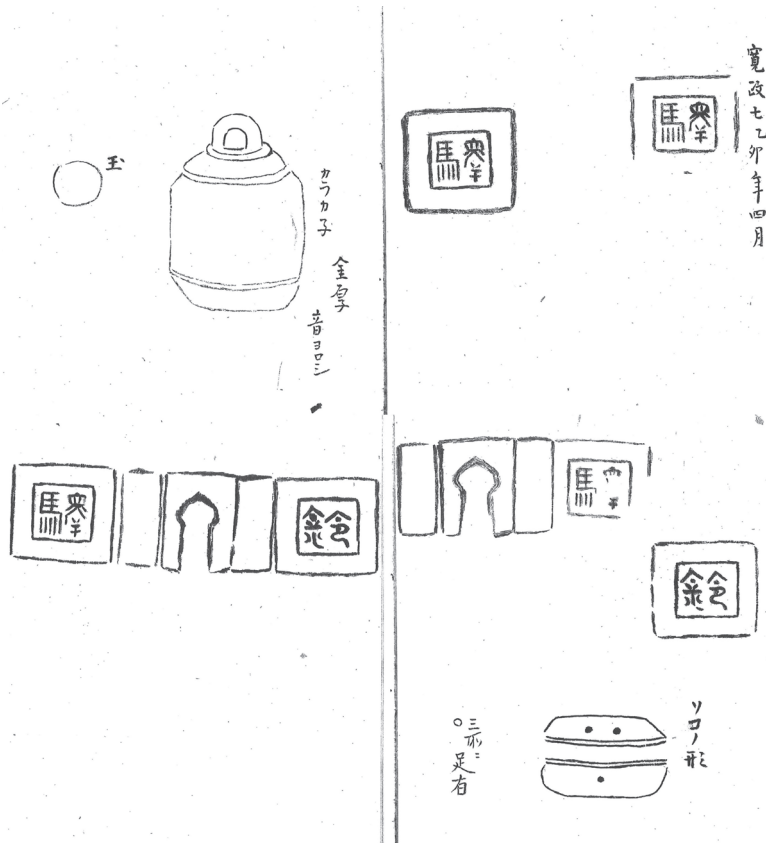


図11 隠岐駅鈴図（『隠岐国造駅路鈴由緒書』宮内庁書陵部）

や宝物に関する問合せに応じて記されたものらしく、吉田家の塩田兵庫による正月十四日、三月十一日の口上覚が付けられる。寛政二年の遷幸行列において隠岐駅鈴が用いられたことが述べられたなかに「去々丑年」とあり、さらに末尾には駅鈴の略図とともに「寛政七乙卯年四月」と記されることから、この由緒書は寛政七年における台覧に関わって著されたものの写しとみられる。略図は外形のみで細部の形状は描かれていないが、底面の図があり、突起が三つであることから甲鈴を描いたものとわかる（図11）。「駅」「鈴」字および側面は拓図のように写し取っている。台覧にあたっては、ある程度正確な模写図が作られたと推測されるが、本図が写された詳しい経緯はわからない。

なお、東京国立博物館『鈴図集』には次のように記される。

隠岐の国造か彼鈴をもたらし大江戸に出られし時上覧も有しとなん、そのをり上野屏風坂高岩寺の宿に物して見たるよし佐久郡野沢義知書付をけり、寛政七年八月二日のことなりとそ。

高岩寺は現在巢鴨のとげぬき地藏として知られる寺院で、かつては上野寛永寺の東側にあった。隠岐国造はここを宿所としたらしく、信州佐久郡の野沢義知という人物がここを訪れて駅鈴を実見したとの記録があるという。京都で多くの知識人が隠岐駅鈴に注目したことは情報として伝わっているはずであり、滞在中には江戸でも多くの人が訪れたと推測される。

F 珍珠囊

京都大学文学研究科が所蔵する『珍珠囊』は、「万国記」・「視聽漫筆」・陳

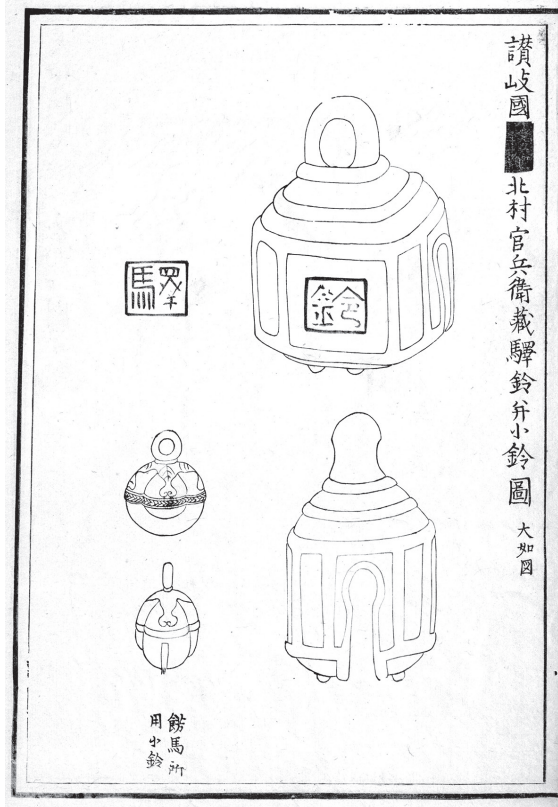


図13 北村官兵衛藏駅鈴并小鈴図
 (『集古十種』国立国会図書館)

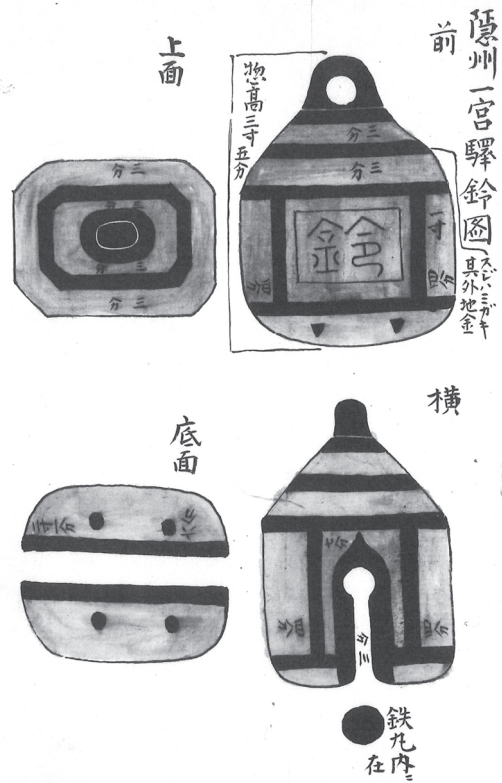


図12 隠岐駅鈴図F (『珍珠囊』京都大学文学研究科)

これによると、隠岐の駅鈴はもとも四つあり、神祭の神輿の前後左右に取り付けていた神宝であったが、八十年前(元禄十六年一七〇三頃)の神祭において左右の二つが泥中に落ち、そのまま見つけることができず失われたという。天明三年とあることから、AとCとさほど変わらないう時期に記されたことになり、隠岐駅鈴図のなかでは早い時期のものである。高橋氏は故実家・高橋宗直(図南 一七〇三〜八五)の可能性もあるが定かではない。

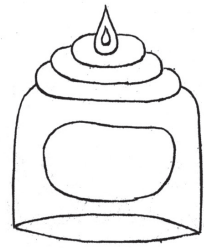
隠州一宮神祭の時、神輿前後の左右、駅鈴四口を持ち之に従う。其の声一里に聞え、以て神宝と為す。八十年前、神祭の時、後ろの左右二口忽に泥中に落ち、即時数人をして之を求めしむも終に得ず。亦恠しむべきなり。今存する所の二口は図の如し。其の質唐金を用ひ、铸造は即ち図の如し。『禁秘抄』引く匡房記云く、俊実・俊通曰く、件の鈴太はだ興有る物なり。或は六角、或は八角と云々。謂ふ所の八角は即ち是なり。

天明三癸卯年初秋中旬 高橋藏
 同年同月写 文哉堂家藏

氏案書図抄・「礼記義疏図抄」・「行厨集抄」・「隠州一宮駅鈴図」・「雲根志」を納めた叢書である。このうち四巻に収められた「隠州一宮駅鈴図」は、「鈴」字のある背面(前)、側面(横)、上面、底面の図を掲載しており、底面の突起が四つある乙鈴を模写したものである(図12)。ただし、外形の輪郭は丸みが強く、鈴口端部も輪郭にくびれがないなど、やや不正確な図である。ここに記された次の識語には興味深い話が語られている。

驛路鈴

讚吉國 陶村三好官兵衛藏



驛鈴ノ二字篆書

一本云

讚岐國多度郡陶村 好官兵衛藏



八稜凡高二寸横二寸唐カ子
隠岐國ノ鈴ト同形

寛政六甲寅四月五日讚岐國多度郡多度津京極侯臣森助左門殿
物語也
吉澤好道識

讚岐國多渡郡 村三好官兵衛所藏八稜古驛鈴

凡高二寸
横二寸



質銅

隠岐國因造藏驛鈴ト同シクシテ只大小ノ違有ノミト云リ
寛政六甲寅四月九日同國同郡多渡津
京極侯藩
森助左衛門語
士寅五月並木復藏本之寫 經

図15 三好官兵衛所藏驛鈴図(『鈴図集』東京国立博物館)

図14 三好官兵衛所藏驛鈴図(『古鈴之図』国立国会図書館)

② 讚岐・三好官兵衛所藏驛鈴

『集古十種』には「讚岐国(ヤ)北村官兵衛藏驛鈴并小鈴図」として隠岐驛鈴とよく似た鈴が「飭馬所用小鈴」とともに掲載される(図13)。一方、越後高田藩の家老で国学者、俳人でもあった鈴木甘井(一七四四〜一八一二)による『古鈴之図』(神宮文庫)やそれを転写した国立国会図書館の『古鈴之図』(以下、これらを鈴木甘井本とする)には「驛路鈴 讚吉国 陶村三好官兵衛藏」として擬宝珠のような形状を描き、「驛鈴ノ二字篆書」があるとする(図14)。ただし、「一本云」として「八稜、凡高二寸(約6cm)、横二寸、唐カネ、隠岐国ノ鈴ト同形」と注記した隠岐驛鈴と似た図をとともに掲載する。この「一本」を『集古十種』は採用したのである。寛政六甲寅四月五日讚岐國多度郡多度津京極侯臣森助左衛門殿物語也 吉澤好道識」とあり、寛政六年に多度津藩京極侯家に仕える森助左衛門から吉澤好道が得た情報とわかる。

吉澤好道(生没年未詳)は字を子徳、通称を彦五郎、俳号を思可という。俳人で国学者であった吉沢好謙(一七一〇〜七七)の子として信濃国岩村田宿(佐久市岩村田)に生まれ、父の後を継いで寺子屋を営む一方、地誌、郷土史に興味を有して古文獻の書写をおこなっている「弓削二〇〇三」。ほかにも複数の古鈴図を甘井が写しており、両者に交流があったことがうかがえる。

また、多度津藩士・森助左衛門(一七四二〜九四)は名を長見といい、広浜堂と号した国学者である。著作に『国学志貝』(天明七年刊)がある。『鈴図集』(東京国立博物館)にも「讚岐國多渡郡□村三好官兵衛所藏八稜古驛鈴」として隠岐驛鈴とよく似た図を掲載する(図15)。次のような識語から、甘井と同じ情報を天保十三年に並木氏の蔵本から転写した「經」という人物から得たということになる。

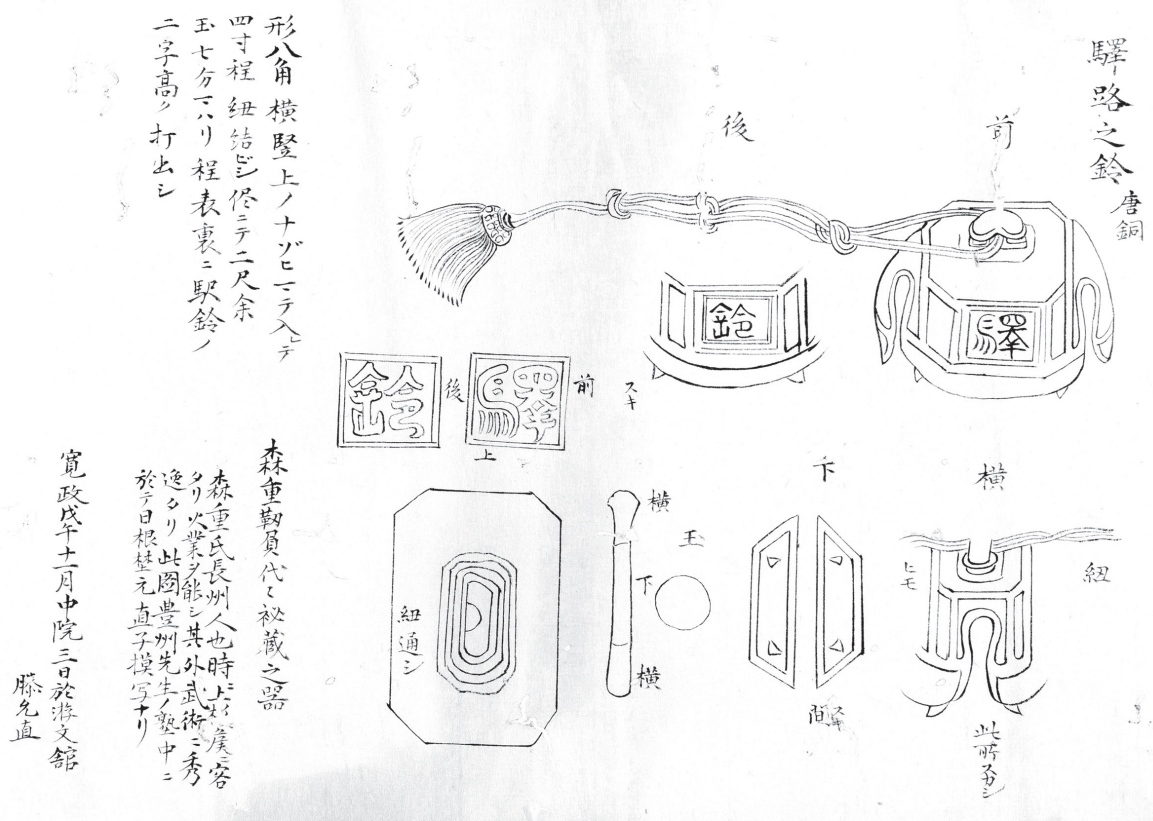


図16 森重都由所蔵駅鈴図(『古物鈴之図』朝日町歴史博物館)

隠岐国国造蔵駅鈴と同しくして只大小の違有のみと云り

寛政六甲寅四月九日同国同郡多度津

京極侯藩 森介左衛門語

壬寅五月並木復蔵本之写 經

栗原信充『柳庵雜筆』(嘉永元年(一八四八)刊)にはこの八稜鈴と鈴木甘井本にあった擬宝珠状の二図を載せ、「成沢寛經校本には三好官兵衛蔵、質銅隠岐国造蔵と同じくしてたゞ大小の違いのみと云り。裏面に鈴字あり」と記すことから、「經」とは信州上田の呉服商・成沢寛經(一七九七〜一八六八)のこととわかる。寛經の祖父・寛致(雲帯一七三九〜一八二四)と鈴木甘井には交流があったことが知られ「杉本欣久二〇一六」、両者が情報を共有していたことが窺える。また信充は「或家蔵本、駅鈴二字篆書、信充云、大小同じからぬは尅数の異なるが故なるべし。一本は自別種にや其実をしらず」と記し、この八稜鈴が隠岐駅鈴より小ぶりであるのは尅数の違いによると解釈する。

③ 森重都由所蔵駅鈴

朝日町歴史博物館『古物鈴之図』には「駅路之鈴」として隠岐駅鈴によく似た模写図を載せる(図16)。寛政十年十一月、藤元直の識語によると、これは森重靱負(都由)が代々秘蔵する鈴で、江戸の儒者・泉豊洲(一七五八〜一八〇九)の塾中にて日根野元直という人物が模写したとある。

森重靱負代々秘蔵之器
森重氏長州人也。時に上杉侯に客たり。火業を能し其外武術に秀逸たり。此図豊洲先生の塾中に於て日根野元直子模写なり。

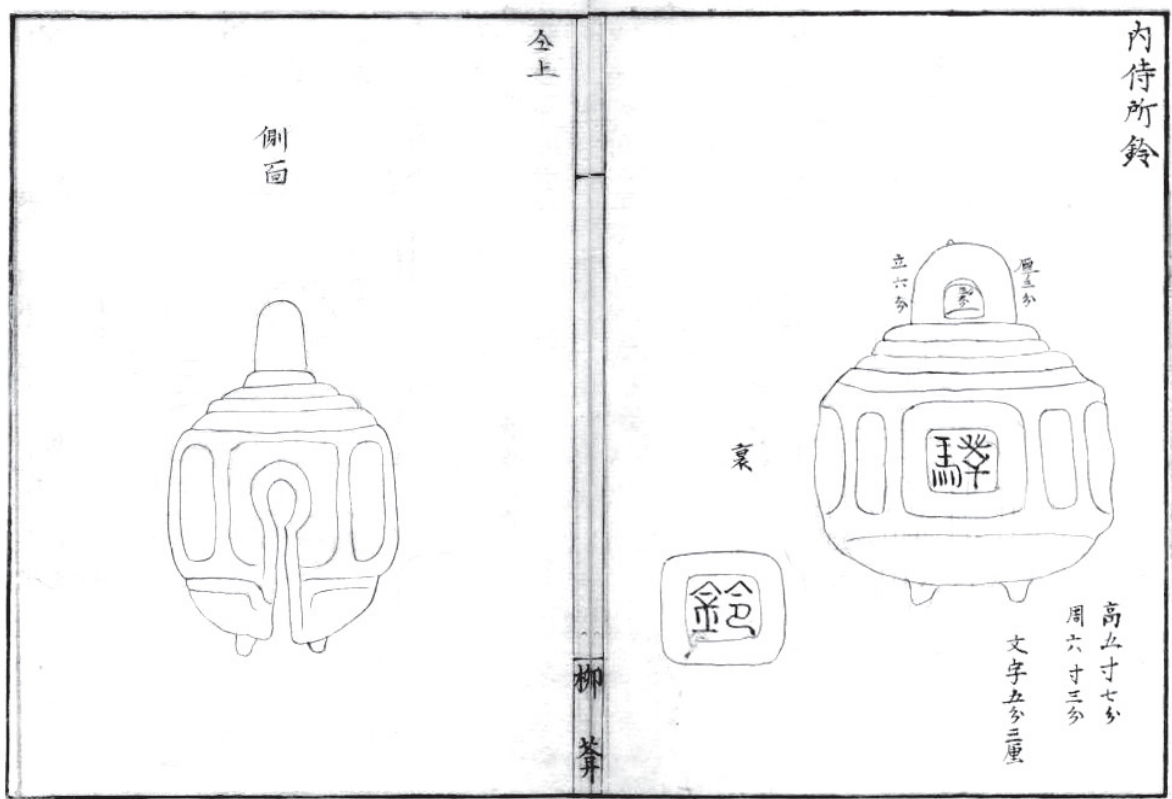


図17 内侍所鈴図(『鈴図集』東京国立博物館)

寛政戊午十一月中院三日於游文館 藤允直

森重都由(一七五九〜一八一六)は周防国末武村(山口県下松市末武)の人で、字を仲美、通称を武平といい、烏山、独立軒と号した。水軍砲術の流派の一つである森重流の創始者で、『合武三島流舟戦要法』(寛政七年自序)などの著作が知られる。

図は正面の全図のほか、背面の一部、側面、下面、丸と鈴口、上面、「駅」「鈴」字からなる。「形八角、横上ノナゾヒマテ入レテ四寸(約一二cm)程、紐結ビシ俛ニテ二尺余、玉七分マハリ程、表裏ニ駅鈴ノ二字高ク打出シ」との注記があり、隠岐駅鈴よりは大きいものと思われる。

④内侍所鈴

東京国立博物館『鈴図集』に「内侍所鈴」として掲載される図は、正面からの全図と背面の「鈴」字、側面を描く(図17)。八角かどうかこの図だけではわからないが、やや丸みを持って描かれた特徴が隠岐駅鈴図Bなどとよく似ており、近い形式と考えてここで取り上げることにする。高さ五寸七分(約一七・三cm)、周圍六寸三分、文字五分三厘、鈕は厚三分、高さ六分、鈕孔は三分とあり、隠岐駅鈴よりは大きいと思われる。宮中の内侍所にある鈴を模写したとみられるが詳細は不明である。

京都で活動した医師・本草家の茅原虚齋(一七七四〜一八四〇)による『茅窓漫録』(文政十二年自序、天保四年刊)に次のようにあり、宮中に隠岐駅鈴を模造した鈴があったとわかる。⁷⁾

今禁中にあるは形チ四角にして大サ二寸許り厚サ一寸許り、上に鈕ありて両面に駅路鈴といふ三字を隠起にし、鈴口は常の鈴におなじ。

先年聖護院より御遷幸の時、隱岐国社司より奉るといふ。

ただし大きさは二寸(約六cm)ほどとあって、本鈴よりはかなり小さい。

⑤ 細川義徳書写鈴

天理図書館『古鈴図巻』、国立国会図書館『古鈴図』、新潟大学佐野文庫『古鈴図』、西尾市岩瀬文庫『駅路鈴之図』に「古代駅路鈴図」として収録され、正面斜めやや上から描いた全図と丸をあらわす(図18)。この図のみでは八稜鈴か判別しづらいが、正面に「駅」字があらわされており、隱岐駅鈴に類するものとみえることから、ここに含めて紹介しておく。識語に年紀や署名はなく、細川義徳という人物による模写図であり、形式の類似から隱岐駅鈴の図ではないかと推測している。

は何人の所蔵か知らず、形象を按ずるに隱岐国造所蔵と此図相類す。恐らくは即ち是国造の鈴か、細川義徳写投する所也。



図18 細川義徳書写鈴図
〔『古鈴図巻』天理大学附属天理図書館〕

正面下段に二つの孔があること、鈴口の輪郭が円形であることなど隱岐駅鈴とはいくつか異なる箇所があるものの、模写・転写における写し崩れの可能性も否定できない。法量などの情報が一切記されておらず、これ以上を明らかにするのは難しい。

(2) 六稜鈴

⑥ 雲州人所持六稜鈴

有職故実家・高橋宗直(図南 一七〇三〜八五)の識語によれば、この鈴は出雲の人が携えて上京したもので、「駅路の鈴」との所伝を有するものの、残念ながら宝永五年(一七〇八)の京都大火により旅館で焼失したという(図19)。

此図之鈴一口、雲州之人所持駅路の鈴の由申伝云々、先年携之上京、其節或人摹其形、今以其図写之、惜哉、此鈴宝永京都大火於旅館焼失云々、御厨子所預紀宗直

六角形の鈴で本体に「駅鈴」等の文字はなく、全面が鍍金されている。頂部に鎖を付けるための座を設け、短い鎖で両端に鍍金の金具が付いた長さ一尺二寸(約三六・四cm)余りの黒漆塗の柄に連結される。鈴の上部四分の一あたりに幅三分(約〇・九cm)ほどの突帯二条を巡らせる。突帯までの高さは三寸二分(約九・七cm)で、これより上には稜線がなく、「しのぎなし、隠起す、上は角も同し」との注記がある。鈴木甘井本には「好道曰、本書に隠起す上とはある誤なるへし、上の角ならんか、今本書のことく写之」とあり、吉沢好道は「上は角も」を「上の角も」と解釈したようで、注記をそのようにあらためている。なお、天理図書館

古物鈴之圖

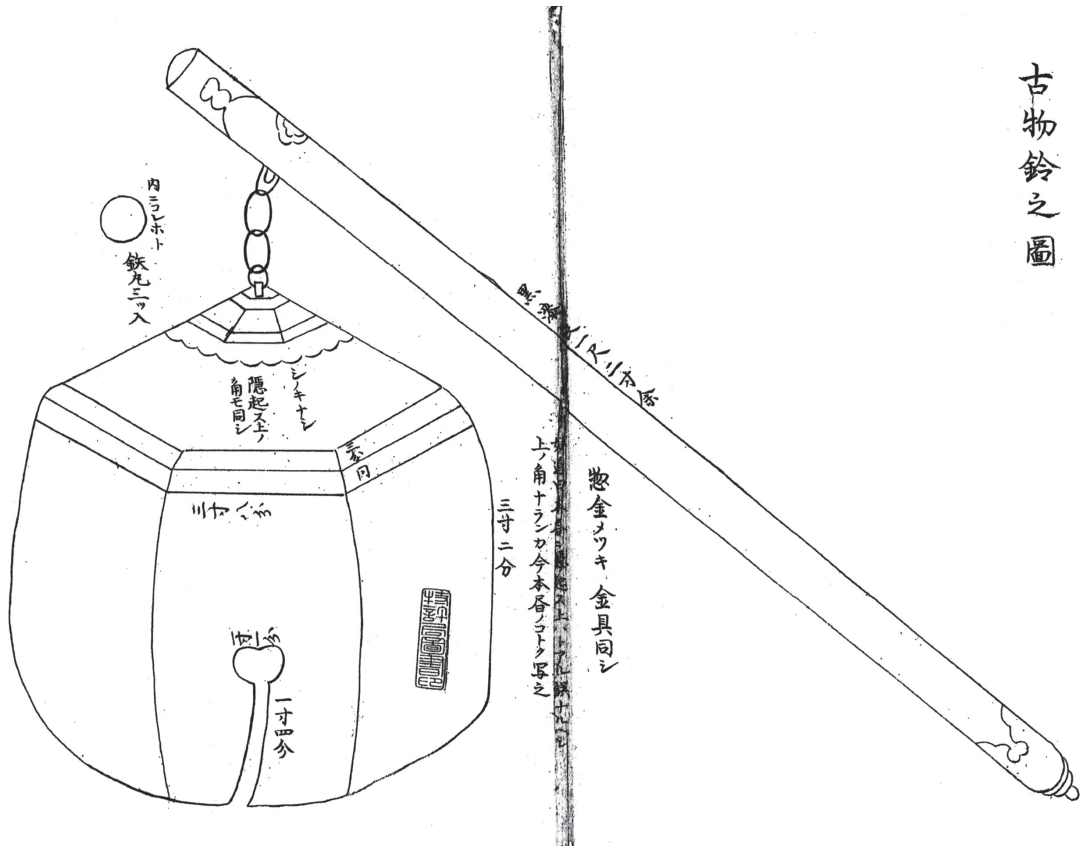


図19 雲州人所持六稜鈴図(『古鈴之図』国立国会図書館)

『古鈴図』は上部にも稜線を描いたうえで、「六角ともに同し」と訂正しており、鈴を連結する座部の描写をみても、転写した人物の解釈がかなり含まれていると思われる。「鉄丸三ツ入」とあり、鉄製とみられる内部の丸は三つであったという。

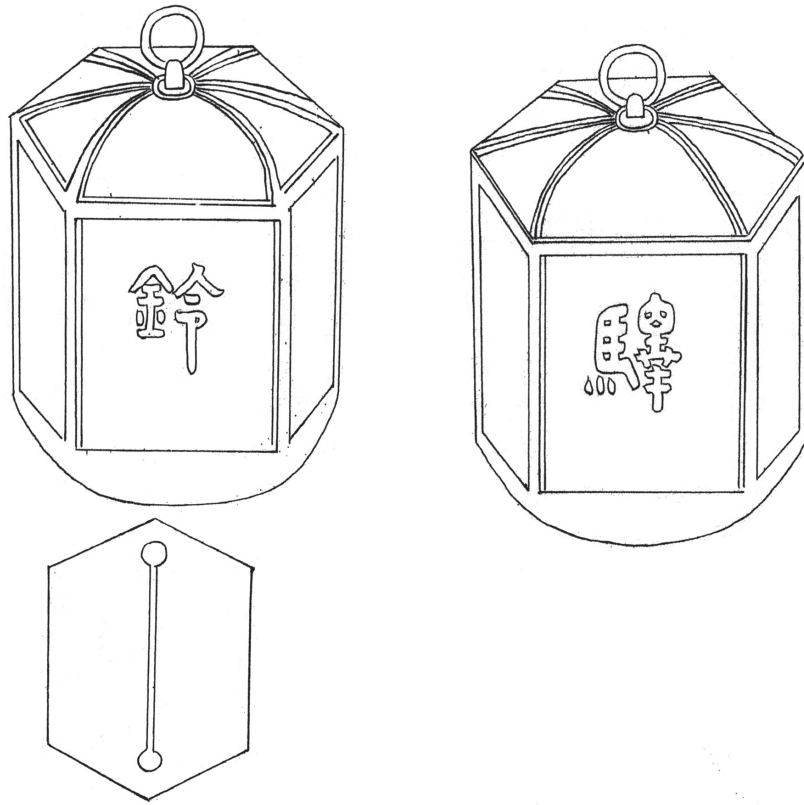
本図は鈴の焼失前にある人物が模写し、のちに高橋宗直が転写したものを元にしてしている。鈴木甘井本の図は宗直から桂宮家諸大夫・大和守大伴(尾崎)積興が借りて写したものを、天明三年十月十二日に酒井常次郎源忠(忠理)が転写しており、西尾市岩瀬文庫『駅路鈴真形図』や同『古鈴図考』掲載図によれば、さらに寛政元年五月十五日に有職故実家として知られる久留米藩士・松岡辰方(一七六四〜一八四〇)の蔵本から蔵書家の旗本・大久保忠寄(一七三六〜一八〇一)が書写するなど、故実家のあいだで写し広められたことがわかる。駅鈴とされたものなかでは出現が比較的古く、多くの古鈴図録に収録されるものの、宗直が転写した模写図の一系統しか情報が残っていないことから、当時は隠岐駅鈴のような注目は浴びなかったとみられる。

栗原信充は『駅鈴考 草本』(西尾市岩瀬文庫)の最後に本鈴の図を載せ、駅家で駅子が手に提げた鈴である可能性に言及しつつ、駅鈴であることには懐疑的な姿勢をのぞかせる。

此鈴の図信州吉沢好道が摹するものを見しに、形製は或家蔵の駅鈴とやゝ似たり。されど駅鈴の二字もなきと見えたれば、形の似たりとて駅鈴とも云かたけれど、昔駅には駅子の持て鳴し行たりと云へは、此図に見たることき柄にて持ありてしや。不知。今其図を出して後考とす。

驛路鈴

私曰右六角驛鈴何方所藏哉本書无一字微他日
得記得者可加筆



吉澤好道識

図20 某所蔵六稜鈴(『古鈴之図』国立国会図書館)

⑦某所蔵六稜鈴

鈴木甘井本に吉澤好道識の「驛路鈴」として正面、背面、下面の図が掲載される(図20)。やや縦に長い六角の鈴で、側面の正背に「驛」「鈴」の文字があらわされる。丸くふくらんだ上面の頂部に環を付け、下面に設けた鈴口の両端を円形に作る。「私曰く、右六角驛鈴、何方所藏哉、本書に一字の微なし、他日記を得たらば加筆すべし」とあり、所藏者などの詳細は一切分からない。

『鈴図集』(東京国立博物館)には「六稜古鈴」と題してほぼ同じ図を写し、次のような五つの注記を入れる。

- ・ 寛云く、分寸質色亦微無く惜しむべし。
- ・ 寛按ずるに、『禁秘抄』云く「鈴印同、俊実通俊日、件鈴太有興物也、或六角、或八角云云」。
- ・ 一本、私曰く、右六角驛鈴、何方所藏哉、本書に一字の微なし。他日記を得たらば加筆すべし。
- ・ 貞幹所謂六稜鈴は此図に当たる。
- ・ 寛按ずるに、『好古小録』云く「六稜の鈴、梨木三位《私曰下加茂社司祐之》の摹本世に伝はる、何の所に存して摸せしにや、摹本に其伝ふる所を記さず、驛鈴の二篆字八稜の書に勝る」。

栗原信充『柳庵雜筆』に本図を「成沢寛経校本」としていることから、「寛」は成沢寛経であろう。寛経は藤貞幹が『好古小録』で触れた梨木三位(鴨祐之 一六五九〜一七二三)摹本の六稜鈴を本鈴と考え、『柳庵雜筆』もこれを踏襲する。しかし、貞幹が本鈴の「驛鈴」字を隠岐驛鈴よりも高く評価したのであれば、『集古図』や『好古小録』に収録さ

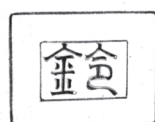
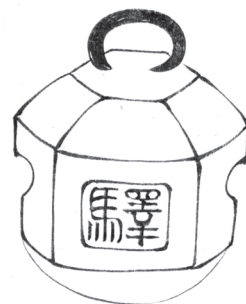


図21 古摹本鈴図(『集古図』国立国会図書館)

れていないことが解せない。本稿では本鈴と貞幹のいう「梨木三位の摹本」とは分けて考えておきたい。

⑧ 『集古図』所載古摹本鈴

藤貞幹のいう「梨木三位の摹本」の有力な候補として考えられるのは、貞幹『集古図』に隠岐駅鈴に続いて掲載される「古摹本」の駅鈴である(図21)。正面やや上からの全図と背面の「鈴」字の図を載せており、一見、隠岐駅鈴と同じ八角鈴と思いたくなる。直前に収録する隠岐駅鈴(図8)の「鈴」字の末画が左方向に折りたたまれて返るのに対して、「古摹本」

の「鈴」字は右下に流れる。この特徴は隠岐駅鈴の甲・乙にみられる違いであり、はじめはこれを乙鈴の模写図と考えた。しかし、貞幹と同時期の天明初年に出現した隠岐駅鈴の「古摹本」は他に見出せず、『好古小録』の記述を考えあわせると、これが「梨木三位の摹本」ではないかと考えるようになった。図を見ると「駅」字のある左右の面が鈴口端部のある側面と思われることから、八稜ではなく六稜鈴とみることが可能である。⑦を「梨木三位の摹本」とするのはあくまで成沢寛経の推測に過ぎず、ほかに傍証もないことから、このように理解する方が妥当ではないだろうか。

⑨ 出雲大社神宝駅路鈴

鈴木甘井本によれば六角形の胴部に細長い柄が付いたハンドベルのような形状で、次の識語から模写図の出どころが判明する(図22)。

土佐国刈谷良蔵より得て写畢 雲帯

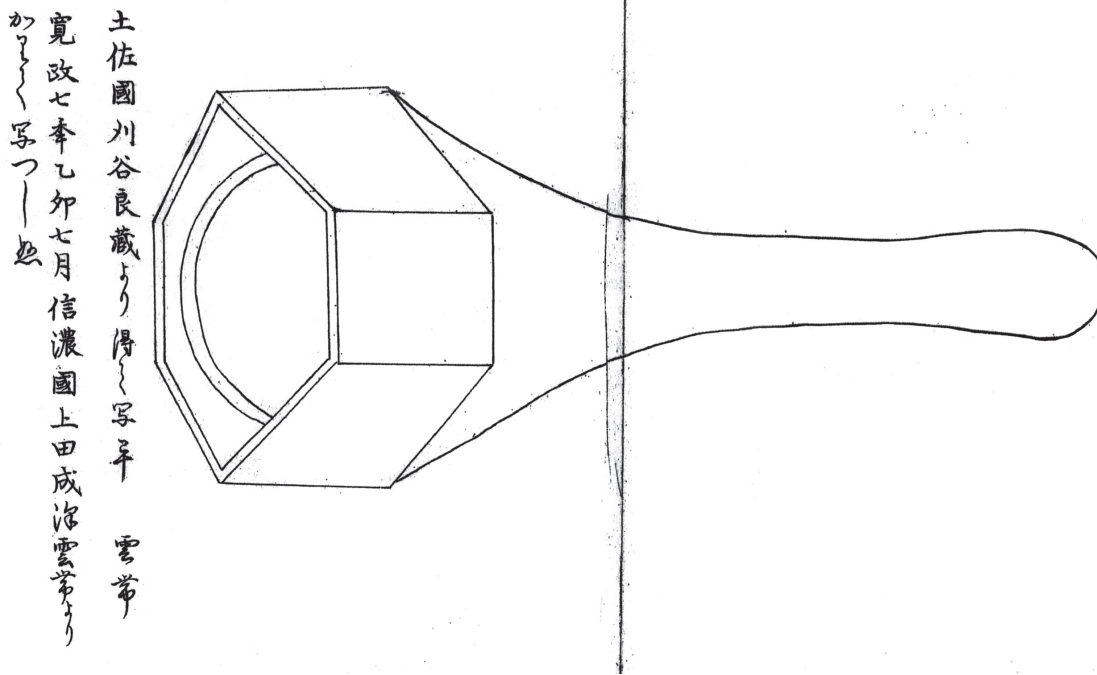
寛政七季乙卯七月信濃国上田成沢雲帯よりかりて写つしぬ

成沢雲帯が土佐の刈谷良蔵から借りて写した図を鈴木甘井が寛政七年七月に転写したという。「駅鈴」の文字は入っておらず、この鈴が駅鈴と伝承される理由はわからない。

⑩ 大宰府駅鈴

久留米水天宮祠官で久留米藩士の真木保臣(一八一三〜一六四)が天保九年十一月に記した「函鈴堂詞」によると、「さいつとし、その頃大宰府のすこし西なる四王寺といふ山より駅路の鈴といふものをほりいたした

出雲國大社神寶驛路鈴



土佐國刈谷良藏より得々写す 雲常
寛政七年乙卯七月信濃國上田成治雲常より
かき写す

図 22 出雲大社神寶驛路鈴図 (『古鈴之図』国立国会図書館)

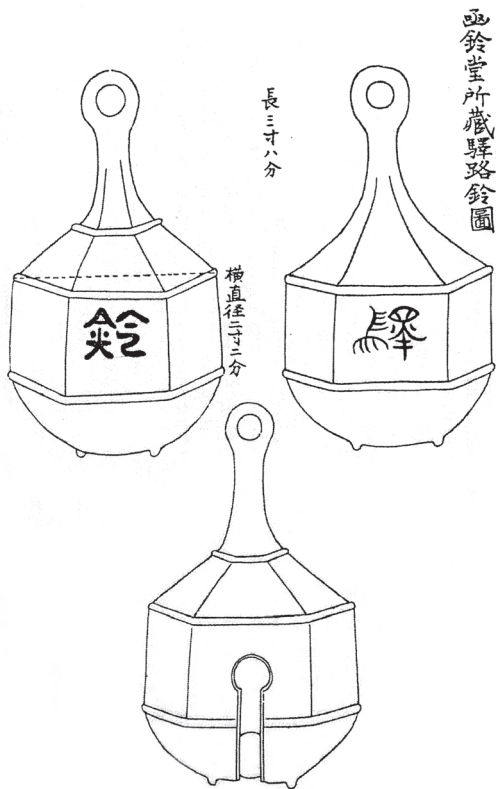


図 23 大宰府驛鈴図 (「函鈴堂所藏驛路鈴図」)

りけり」とあり、天保六年に大宰府の西にある四天王寺山から「驛路の鈴」を掘り出したという「小川一九七六・一九九八」。「其かたちは『禁秘御抄』に見えたる六角のなり、驛鈴といふ文字を篆書してうらおもてにかきわけ」であった。博多の某人が所有していたこの鈴を入手した「吉田の大人」は、自邸の庭の小高い場所に社を建てて祀り、さらには書齋を函鈴堂と名づけて驛鈴の關係史料を集成した「函鈴考」を著したという。

「函鈴堂所藏驛路鈴図」(図 23) によれば、六角形の胴部の二面に篆書風の「驛」「鈴」字があらわされる「高橋一九八六」。底面は丸く、隠岐驛鈴のような脚状の突起がある。鈕は柄のようになや長く延びて、先端を環に作る。注記には長さが三寸八分(約一・五 cm)、横直径が二寸二分(約六・七 cm)とある。

(3) 三鈔鏡(鬼面鈴)

①常陸国鹿嶋郡正等寺鈴

正等寺は鹿島神宮五ヶ寺のひとつであったが、現在は廃寺となつてい
る。鹿島神宮に現存する本鈴は密教系の法具とされる三鈔鏡であり、鬼
面をあらわした茄子形の鈴部に、上半を三鈔形に作つた柄が付く。鑄銅
製で総長二九・八cmという。その模写図は多くの古鈴図録に収録され、
複数の系統が確認できる。西尾市岩瀬文庫『駅路鈴真形図』および同『古
駅鈴図考』掲載の図には「常陸国鹿嶋郡鹿島正等寺藏板駅路鈴ノ図」と
あり、摺物として配布されたことが窺える。

A 享保十七年

享保十七年(一七三二)五月、大学頭・信篤(鳳岡)の子で信充(榴
岡)の弟にあたる林信智(確軒 一六八七〜一七四三)による文章が付
属し、駅鈴について述べたうえで、「源康懿君、其の図を閲して所感有り、
而して賛を其の首に請ふ」とある(図24A)。

B 元文元年

元文元年(一七三六)の文章が付属するものの、文中に「章按」とあ
るのみで筆者は明記されない(図24B)。「右今度諸所御尋之処、常陸国
鹿島之祠正等寺より図を献す。神前之箱の中、古来より伝り有し由」と
あり、「一本云、此鈴鹿島神前宮ノ中ニアリ、享保廿一年四月、従將軍
家有御尋備上覧ユ」とも書き添えられる。

C 敬郷

新潟大学佐野文庫『古鈴図』や西尾市岩瀬文庫『駅路鈴之図』に収録

される本鈴の模写図には次のような文章が付される(図24C)。

有徳廟の時、駅路の鈴の形を林家に問せたまへども知り奉らざらば、
神祇官は御尋有べしとて、白川従二位雅光王に尋たまへども知りた
まはず、故に国中を普く尋たまふ。爰に鹿島の大宮司申上る、明神
の前に宝の箱といへるあり、乃鈴明神います。然ども世々拝する事
あたはず。是は君命也。命に替て神に祈り奉らんに、何ぞ験しあら
ざらんと。爰に於て百日水行絶食して、謹て箱を披き神躰を拝す。
于時享保廿一年復四月也。乃是を謹て書写し將軍家に奉り、是より
貌分明なり。敬郷

これらA〜Cを合わせて考えると、次のような出来事があったとわか
る。あるとき八代將軍徳川吉宗は駅鈴の形状について林家に下問したが
知らなかった。さらに代々神祇伯を世襲する白川伯王家に尋ねたが不明
であった。そこで全国に問合せがなされた結果、鹿島神宮から神前の宮
中にある鈴の模写図が献上された。享保十七年、この図に感じ入った
吉宗は信智に賛を命じる。さらに吉宗は同二十一年四月にこの鈴を上覧
したのである。

吉宗は宮廷儀礼の古式にも関心を有し、『桃華藥葉』(一条兼良 文明
十二年(一四八〇)の考定、『延喜式』からの抄出、『貞観儀式』の校
正などをおこない、水戸徳川家から光圀が編纂した年中行事や儀礼に関
する部類記『礼儀類典』が献上された際には、くりかえし目を通して不
審点を儒者に尋ねたという(『有徳院御実紀附録』卷十)。駅鈴について
も古文獻を読むなかで興味を抱き、林家などへ質問したと思われる。

紹介された時期が早く、そこに將軍吉宗が関わっていること、また所

有者が明確であることから、これ以降も数多くの模写図が作成され、出版物に取り上げられることも少なくなかった。そのいくつかを紹介しておく。

D 尾崎積興

『鈴図集』（東京国立博物館）に、

此図、大和守大伴積興より恩借書写せしむる者なり。時に天明第三十月十二日、駒之町旅宿に於て。酒井常次郎源忠理

との識語がある図を載せる（図24D）。天明三年に酒井忠理が有職故実家の桂宮諸大夫・尾崎積興（一七四七～一八二七）から借り、京都駒之町の宿にて写したとある。なお、このとき忠理は雲州人所持六稜鈴（⑥）も筆写している。

柄や鬼面の表現からAの系統に属する可能性があるものの、鈴上部の花弁形が単純化されている。

E 空華談叢

興正寺五世諦忍（妙竜 一七〇五～一八六）が著し天明六年に刊行された随筆集『空華談叢』にも本鈴の図が掲載される（図24E）。『空華談叢』は諦忍が仏教や世俗に関わるさまざまな事柄に答える問答形式で記されており、第一巻に「駅路鈴」の項目を立てる。古代駅路の鈴は振って行くことがあるとはどのような故事であるのか、またその鈴の形はどのようなものかという問いに対して、異国の上古には木鐸を振るといふこと¹⁰があり、わが国はそれに倣って鈴を振るのでと説き、その形状に

ついでには「今の世には其器絶て無しに僅に存す。常州鹿嶋郡正等寺に現存す其形勁正にして其製朴古なり」として図を示す。細部の描写はかなり簡略化されている。

F 八木正富

天理図書館『古鈴図巻』や国立国会図書館『古鈴図』に黒く塗った本鈴の図が掲載され、「以八木正富之所蔵模写之曇 寛政壬子年三月下旬真未」とあることから、寛政四年に八木正富が所蔵する図から高橋真未（狩谷椽齋）が転写したとわかる（図24F）。鈴口部の装飾が表現されない点がほかの図と異なっている。

G 集古十種

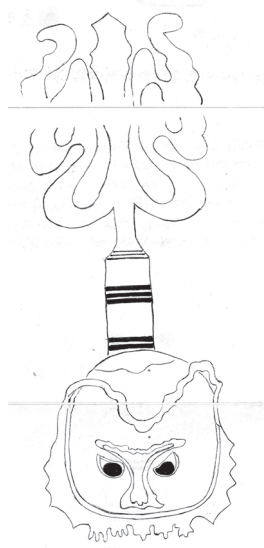
松平定信が編纂させた『集古十種』にも収録されるものの描写は簡潔で、鬼面はD、柄はEの表現に近い（図24G）。

H 茅窓漫録

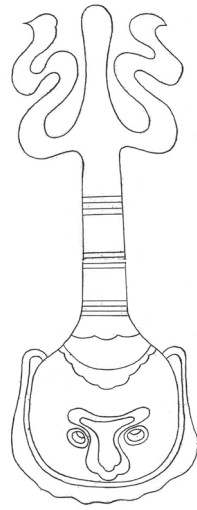
茅原虚斎『茅窓漫録』（文政十二年自序、天保四年刊）には上巻の冒頭に「駅路鈴」の項を立て、篆刻家として知られる高芙蓉（一七二二～一八四）によるといふ本鈴の図を掲載する（図24H）。ただし、柄にある二本ずつ三組の突線や鬼面の表現は粗略で実物との隔たりはさらに大きくなっている。

I 鹿嶋志

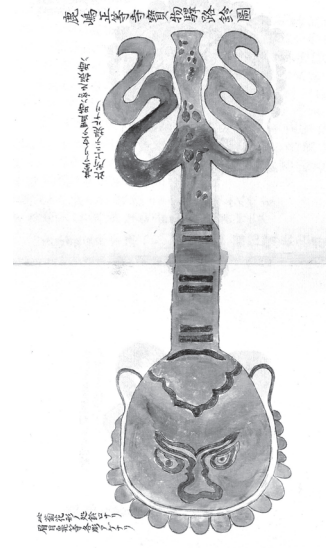
国学者でもあった鹿島神宮神官・北条時鄰（一八〇二～一七七）が著した『鹿嶋志』（文政六年刊）の下巻にも『茅窓漫録』と特徴が近い図が



C『古鈴図』新潟大学佐野文庫



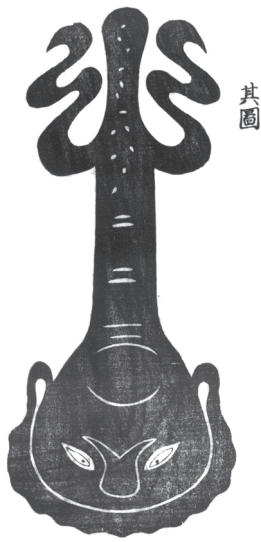
B『古鈴之図』国立国会図書館



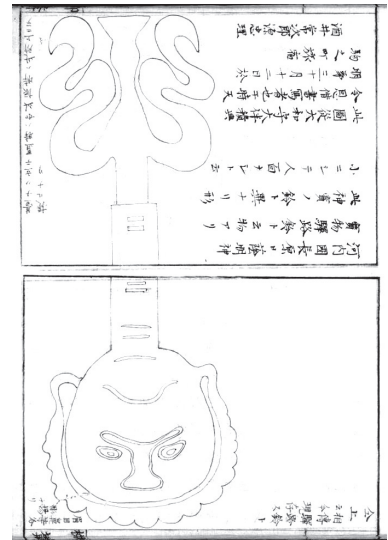
A『古鈴図』新潟大学佐野文庫



F『古鈴図』国立国会図書館

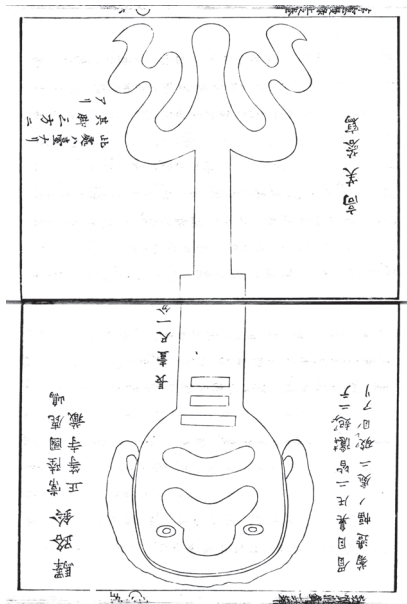


E『空華談叢』
大阪府立大学学術情報センター

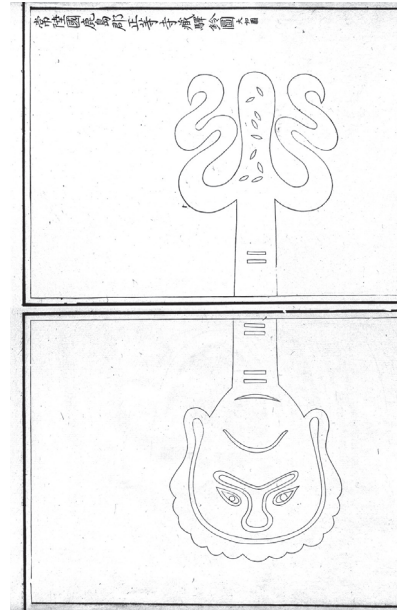


D『鈴図集』東京国立博物館

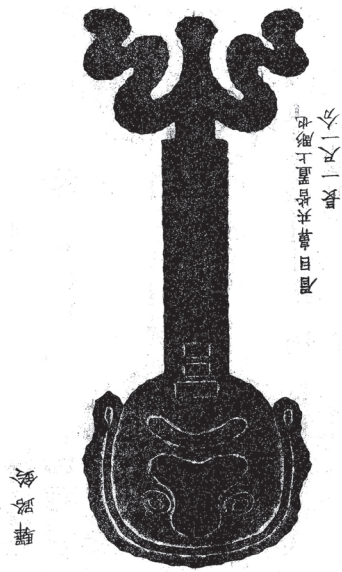
図24 正等寺鈴図



H『茅窓漫録』国立国会図書館



G『集古十種』国立国会図書館



I『鹿嶋志』国文学研究資料館

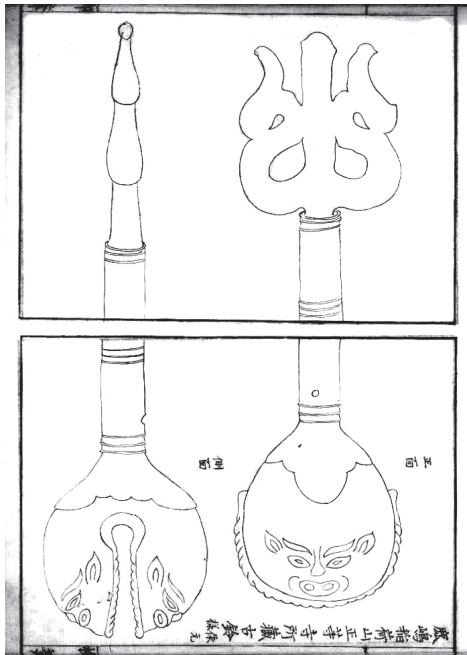


図25 正等寺鈴図 依元様
 (『鈴図集』東京国立博物館)

掲載される(図24 I)。刊行は『鹿嶋志』の方が早いものの、文中に『茅窓漫録』を引用していることから何らかのかたちで刊行前の『茅窓漫録』にあった図を参考にした可能性があらう。鹿嶋正等寺に駅鈴が存在する理由について、

按に駅路鈴はいにしへ勅使国々の任に下る時、鈴印とてかならず是を賜り、駅路を鳴らし過るものなり。されば昔神宮奉幣に下りたる勅使などに、故ありてこの鈴のとゞまれるならん。

と、勅使が現地に留め置いたためと推測し、寛仁元年(一〇一七)十月二日、後一条天皇の即位に際して派遣された大神宝使に駅鈴を支給されている事例を『参東記』という文献から挙げる。

これらA Iの模写図を見ると、柄と鈴の間にあるくびれの有無や鈴上部の花弁形や鬼面の表現、鈴口部の装飾の形、柄にある条線などに違いがある。時期が下るにしたがって描写が省略され、実物と乖離していく傾向がある。ただ『鈴図集』(東京国立博物館)に「依元様」とする一図があり、実物を閲覧のうえで模写したのか、比較的正確に描かれている(図25)

⑫ 下総国葛飾郡吾孀神社鈴

吾孀神社は現在の東京都葛飾区立花にあり、日本武尊の妃・弟橘媛命を祀る。⑪と同じく鈴部に鬼面をあらわした三鈷鏡であるが、鬼面の表現や柄の形式には違いがある。鈴木甘井本にはそれぞれA「駅路鈴真形図下総国葛飾郡吾孀神社宝」、B「吾妻森所蔵駅路鈴図銅制如図」と

題する二種類の図を掲載する。

A 白蓮社空阿

次のような識語から天明三年三月に白蓮社空阿が源勝賢、藤教武、源良徳とともに吾孀神社の開帳を訪れ、神職に要望して三鈷鏡の模写をおこなった図とわかる(図26)。

天明三年癸卯三月十日開帳、源勝賢、藤教武、源良徳をとみなひ此宮にまうて此神宝を社人にこひてうつしぬ。盤溪白蓮社主人空阿

ことしの開帳の時、われも此神宝を見たりしに、うつすまもえせて過にしをいと口をしくおほへたりしに、六月六日空阿大徳のかりまかりしをりあるし、これなんうつしへとてものしたり。それ我さきの本あとけにしとよろこひつつ、こひえてこれをうつして深く文は図のうちに置きむ。

天明三年六月廿日 隅東散人日下部(花押)

日下部勝美之藏画乞得而写畢

同年七月十八日 藤原忠寄

白蓮社空阿(生没年未詳)は俗名を源義亮良明といい、盤溪、臨川居などと号した。『国風随』(宝暦二年)、『佐賀美路乃記』(安永六年(二七七七))、『いそのかみ』(安永八年自序、寛政十年刊)、『月名考』(安永十年自序)、『廟陵考』(天明七年)、『後之相模路日記』(寛政四年)、『雲上再営図』(寛政五年)、『源語類聚抄』、印譜『運斤清機』などの著作がある。安永三年十一月から同五年三月にかけては、日下部勝美、小野高潔、金子尹庸、平長貞らと『続日本紀』の会読をおこなうなど、国学的

な関心が高かったことが窺える「岡二〇〇二・二〇〇四」。なお、お茶の水女子大学図書館『五事略続編』には、青木昆陽による『国家金銀錢譜』、『国家金銀錢譜続集』への空阿による補遺や皇朝錢について考証した「錢文考」が収録されており、貨幣についても興味を有したことがわかる。

同年六月には幕府和学講談所の初代会頭である日下部勝美（奈佐勝皐一七四五〜九九）が空阿から図を借り受けて転写し、さらにそれを大久保忠寄が写しているとわかる。なお、『鈴図集』（『東京国立博物館』）収録の同図は、寛政元年六月二十三日に大久保忠寄蔵本を借りた松岡辰方が写したものとなっている。

本図は正面からの全図のみであるが、次のような細かな注記が入っているのが特徴である。

・鈴頭上より口まで径二寸八分（約八・五cm）、耳の端より端まで径二寸（約六cm）、鈴両面ともに面目あり、惣金色、火にかゝり赤



図26 吾嬭神社鈴図A
（『古鈴之図』国立国会図書館）

く斑に見ゆ、目鼻筋毛とも高五リン（約〇・二cm）ばかりほり上たる如く鑄出したり、毛筋太五リン、横二分半也、

・頭上毛両面とも十三すち、社人社僧等曰、先年神蔵類焼、折たるをちゝめて近年継たりと云、

・口中に銅丸あり、鼻根耳間にて表より裏まで厚一寸七分（約五・二cm）、わに口の如くふちたんくうすし、

・（鬼面耳部）耳一寸三分（約三・九cm）、耳厚四分（約一・二cm）、左右とも洲はま形の穴あり、

・（柄部）この間一寸（約三cm）、此間やけ折たるをちゝめてつぐ、此間九分（約二・七cm）、二寸三分（約七cm）、一寸八分（約五・五cm）、此毛ほり廿八すち、此すち十一筋残てあり、

鈴部の鬼面は表裏両面にあり、目、鼻筋、毛を突線であらわす。頭上の毛は両面とも十三筋ある。耳にあたる部分は左右とも洲浜形の孔がある。柄の鬼面側には縦方向の毛彫りが二十八筋、三鈷側には横方向の筋が十一ある。神職や僧侶によれば、神蔵が類焼したため火にかかり、折れた柄を縮めて継いだという。

B 村山芝塙

Bには「戊申十月初云観 東都 村山緯摸」とあり、天明八年に福岡藩の儒者・村山芝塙（一七五八〜一八二〇）によって模写されたことがわかる。図は正面と側面の全図で、柄の三鈷がひとつ欠失している点がAの図とは異なる（図27）。Aに火事によって折れた柄を継いでいるとあるので、この修復箇所が数年の間で再び折れて失われたと推測される。そのほか鬼面の表現がやや異なり、柄の形状や刻線にも違いがある。

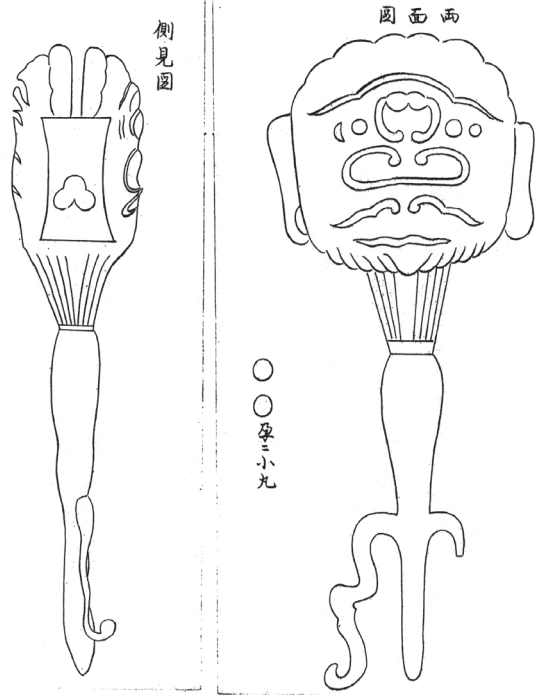


図 27 吾妻神社鈴図B (『古鈴之図』 国立国会図書館)

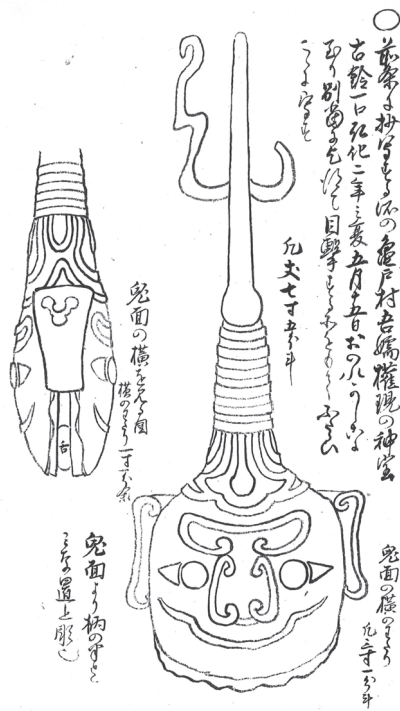


図 28 吾妻神社鈴図C (『駅鈴記』 京都大学文学研究科)

本図には吾妻神社や駅鈴に関する解説の文章が付属する。

：然て鈴の下の柄に横尅あり。其数の多少によりて伝馬を給するの多寡ありと見えたり。此の図其の尅数を失う。謾て横尅を加え、故に符の尅数能く徴し難き也。其の造象甚だ奇異、後世鰐口の制蓋し此より出るか。固より千古の物、皇国上古の制度を観るべき也。

大洲市立図書館矢野文庫『古鈴鐸図』によれば、この文章は寛政元年八月上旬に青柳弥彦によって記されたとあり、さらに文久元年(二八六一)「求古堂主明輯」とある。また鈴木甘井本収録の本図は、松岡辰方の蔵本から寛政九年九月に神田茂助長良、同十一年三月に鈴木金藏重副、同四月に吉沢好道、同十月に鈴木甘井と、短期間に写し伝えられた。神田、鈴木の両氏は美濃苗木藩士である。『鈴図集』(東京国立博物館)掲載の図は、寛政九年七月に穂積一保(鈴木甘井)が所蔵していた松岡辰方蔵本からの写しを成沢雲帯が転写し、天保十二年九月に孫の成沢寛経が校正を加えて写したとある。

C 片山賢

京都大学文学研究科が所蔵する並河一敬『駅鈴記』の写本の後半には、諸書掲載のものや人づてに入手した古鈴図の集成が付属しており、このなかにA、Bとは異なる吾妻神社の三鈴鐸図が収録されている。「雑司谷片山賢」の印記があり、ところどころに「賢云」の注記があることから、この写本は幕府御鷹部屋雑司ヶ谷組の鷹匠同心・片山賢(一七九六〜一八五三)による書写であり、古鈴図も彼の集成であるとわかる。

片山賢は字を孟賢、通称を勇八、雄八郎といい、絵を大岡雲峰に学び

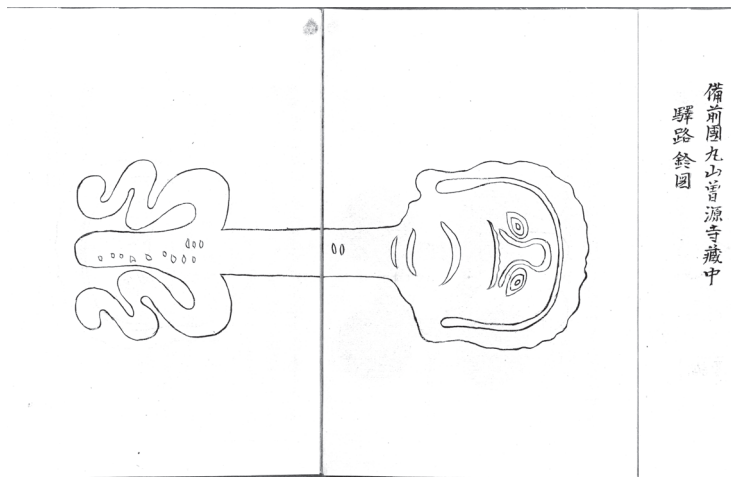


図29 曾源寺鈴図(『古鈴図』新潟大学佐野文庫)

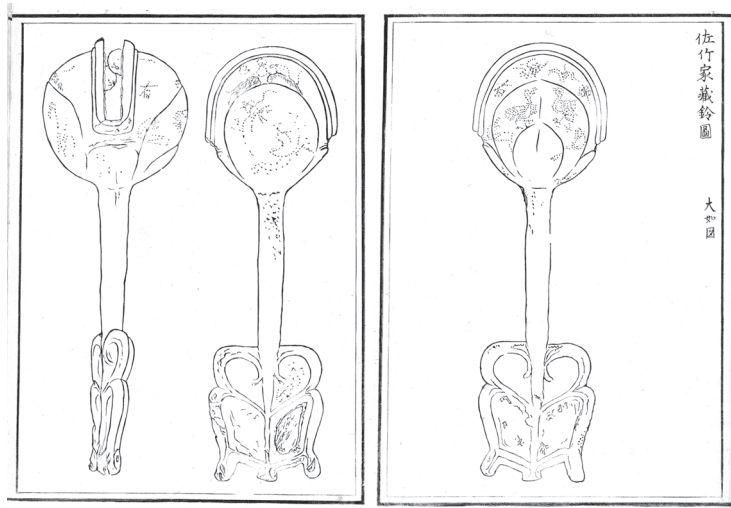


図30 佐竹家藏鈴図(『集古十種』国立国会図書館)

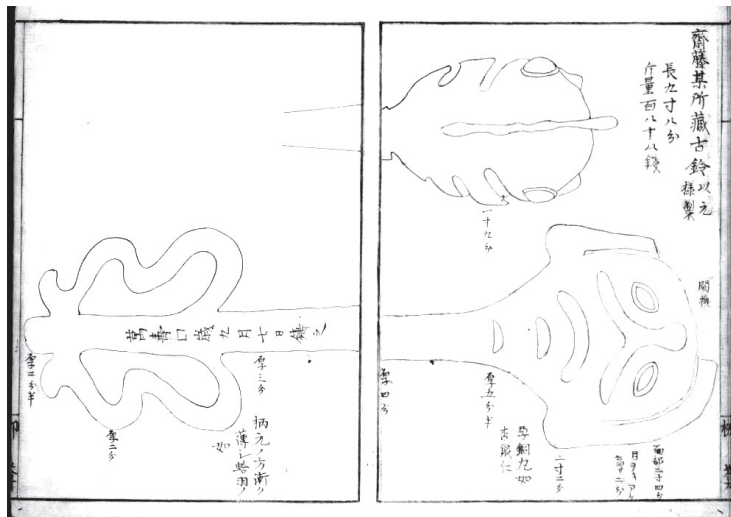


図31 齋藤莞齋藏鈴図(『鈴図集』東京国立博物館)

(画号百葉)、琴は鳥海雪堂門(琴号凹泉)であり、また俳号を聴雪と称した。蔵書家であつたらしく、見聞などをつづつた随筆的な著述も多い〔三保二〇一六〕。国学に傾倒したらしく、本資料もそのひとつとみられる。弘化二年(一八四五)五月十五日に自ら神社を訪れて実物から模写したようで、全図と鈴部の側面をあらわす(図28)。

⑬ 備前国丸山曾源寺鈴

曾源寺(岡山市中区円山)は岡山藩主池田家の菩提寺で、二代藩主池田綱政が元禄十一年に高祖父恒興と父光政の菩提を弔うために創建した

寺院である。新潟大学佐野文庫『古鈴図』および西尾市岩瀬文庫『駅路鈴之図』に「備前国丸山曾源寺藏中 駅路鈴図」として三鈴鏡を掲載する(図29)。識語、注記等はなく、いつごろに模写されたものかはわからない¹⁾。

⑭ 佐竹家藏松峰寺跡出土鈴

享和三年(一八〇三)六月十八日、秋田の松峰神社別当寺伝寿院を訪れた菅江真澄(二七五四〜一八二九)は、住職の話として、明応(一四九二〜一五〇一)頃に「南谷」の崩土から発見された「駅路の鐸」を近年藩

主に献上したと『贅能辞賀楽美(にえのしがらみ)』に書きとどめている。「近きとしに此鈴をめしたまへば、守に奉りきと聞えし」とあり、秋田藩主・佐竹義和(一七七五〜一八一五)の上覧を契機に献上されたと思われる(伝寿院宛ての覚より、献上されたのは享和元年十二月九日)。この鈴は『集古十種』に佐竹家蔵鈴図として収録され(図30)、東京国立博物館に現存する。

このほか東京国立博物館『鈴図集』には「河内国長原日蔭明神宝物路鈴と云物あり。此(鹿嶋正等寺)神宝の鈴と異なり形小にして人面な」と云とあり、河内国長原日蔭明神(大阪市平野区長吉長原・志紀長吉神社)にもやや小振りて人面(鬼面)のない三鈷鏡があり、茅原虚斎『茅窓漫録』には「今は同地丹上郷弥五郎が家に秘蔵せり」と伝える。また、西尾市岩瀬文庫の栗原信充『駅鈴考 草本』(文化十二年)にも三鈷鏡形の駅鈴として「武蔵豊島郡四谷子安稻荷社神宝駅路鈴」を挙げる。ただし、今のところこの両者の模写図は見出せていない。

神田の町名主・斎藤家が長秋(幸雄)、莞斎(幸孝)、月岑(幸成)の三代にわたって書き継いで刊行した『江戸名所図会』(天保七年刊)の巻七、吾孀権現社の項には「神宝古鈴一口」として⑫鈴を次のように紹介するとともに、略図ではあるものの吾孀社鈴、正等寺鈴と藤原縣磨蔵鈴の三図を掲載する。

長さ八寸はかりあり、銅色愛すへし。

是に同じきもの常陸の鹿嶋正等寺にもあり、又息男縣磨の家にも蔵せり、其形状大同小異なる故に図を臨し加ふのミ。

藤原縣磨は長秋の養子にあたる斎藤莞斎(幸孝 一七七二〜一八一八)で、国学者、考証家としても知られる。静嘉堂文庫『古鈴集図』は寛政十二年に莞斎が蜷川親常所蔵の「古鈴之図」を転写したうえ、新たに九点を加えたものであり、古鈴に関心を抱いていたことが窺える。「杉本欣久二〇一六」。東京国立博物館『鈴図集』には「斎藤某所蔵古鈴」として柄に「萬壽□歳九月七日鑄之」とある三鈷鏡の図が掲載されており、莞斎の所蔵した品とみられる(図31)。ただし、『江戸名所図会』、『鈴図集』ともにこれを駅鈴とは明記していない。

(4) 鑲鈴

⑮『詹々言』所載鈴

並河一敬『駅鈴記』には次のような鈴を紹介している。(図32)

又一種有り、俗に駅鈴と呼ぶは、形円にして正中に円孔有り、外縁に裂口有り、鉄を以て造る。漢名、方に女奈止須々と言うべし。又女苦羅須々と名づく。伝へて言く、盲人夜行の時、指を孔中に容れ、振て以て人撞撃するを避く。其の図左の如し。

鉄で作られた中空のドーナツ形で、外側面が鈴口となっている。中国では「虎撐」といい、わが国では「めなしすず」または「めくらすず」と称したという。盲人が夜道を行くときに指を中央の孔に入れて振り、すれ違う人とぶつかるのを避けたと伝えられる。

これはもともと『詹々言』(寛延三年(一七五〇)刊)で紹介された鈴である(図33)。

今駄路の鈴と覚居るものは唐土にて虎撐と云もの也。唐土にて医者
 是を手指に挿み市中を振行く。人其声を聞き呼入れて薬を求むる也。
 本邦にて按摩するもの小笛を吹き行くと同し。図左に出す。

中国の「虎撐」は医者が手指にはさんで市中を振り歩くための鈴で、
 その音を聞いた人びとが呼び止めて薬を買うという。著者は京都の儒学
 者で本草学にも通じた松岡玄達（恕庵 一六六八〜一七四六）である。

○又有一種俗呼駄鈴者形圓而正中方圓孔外縁有裂
 口以鐵造馬漢名虎撐方言女奈止須；又名女苦羅
 須；傳言盲人夜行時容指孔中振以避人撞擊其圖
 如左



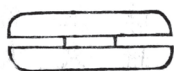
此の鈴は、盲人の夜行時に、指孔の中を振って、人々の撞撃を避けるために用いられる。其の形は、圓形で、中央に四方の圓孔を有し、外縁に裂口を有する。馬漢名は虎撐、方言は女奈止須、又名は女苦羅須である。

平之圖



徑り貳
 寸貳步

横之圖



厚サ壹寸

図33 『詹々言』所載鈴図

図32 女奈止須々々圖(『駄鈴記』京都大学文学研究科)

玄達はそれまでの本草書に誤りが多く、名称と実物の齟齬や混同を正
 すべく本草学に傾倒したというが「杉本つとむ一九八五」、虎撐と駄鈴
 を結び付けた根拠は不明である。享保六年には幕府の命により江戸にお
 もむいているが、同二十一年に將軍吉宗が上覧した鹿嶋正等寺の三鈷鏡
 が駄鈴とされたことには触れておらず、これを知らなかった可能性が高
 い。

(5) 水滴形鈴

樋畑氏のいう「垂葉式駄鈴」は茄子形、六稜の角錐体で、中央部各稜
 面の上に「駄鈴」の文字を刻み、各面には葉脈状の文様があらわされて
 いる「樋畑一九三九」。盛田久左衛門、北畠治房、松野尾儀行らの所蔵
 品があるという。江戸時代の資料にはほぼ同じ鈴部を有し、これに柄が
 付いたものを二点見出すことができた。仮に水滴形鈴と名づけて紹介し
 ておく。

⑩北越青木氏所蔵寛元五年鈴

『天保山名所図会』（天保六年刊）に掲載される北越青木氏所蔵の
 「寛元年間駄鈴之図」は、矢羽根状の突起が付いた柄に「寛元五年」
 （二二四七）の銘を有する（図34）。鈴部は上半を多面（六面か）、下半
 を丸みのある円錐状に作る。図にあらわした上半の各面にはそれぞれ書
 体の異なる「駄鈴」の文字を入れ、上下を矢羽根状の文様で埋める。

出羽庄内の国学者・池田玄斎（二七七五〜一八五二）は『弘采録』（酒
 田市立光丘文庫）に同図を載せ、「北越の青木氏の蔵器は曇眼の鏃のこ
 とく、寛元五年の銘あり。此年号ハ後嵯峨帝の御宇なり。奇なる形なか
 ら古雅に見ゆ。」と記す^⑩。

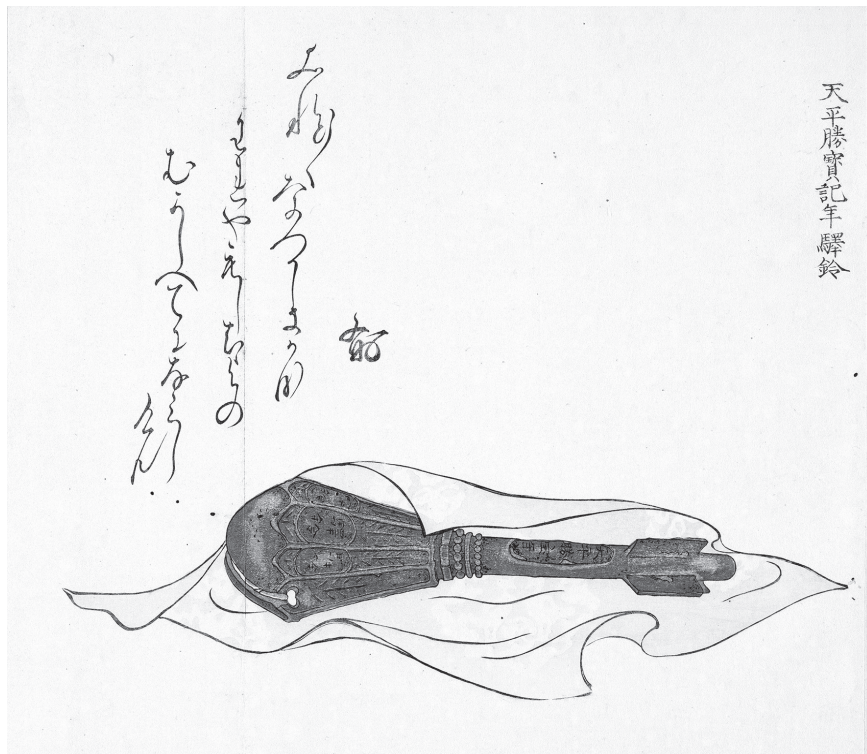


図35 天平勝宝記年驛鈴図(『聆涛閣集古帖』国立歴史民俗博物館)



図34 青木氏蔵鈴図
 (『天保山名所図会』
 国文学研究資料館)

⑰ 『聆涛閣集古帖』所載天平勝宝年鈴

もう一点は摂津国菟原郡住吉村畠田(兵庫県神戸市)の豪商・吉田家により編纂された古器物図譜『聆涛閣集古帖』(国立歴史民俗博物館)に収録される「天平勝宝記年驛鈴」である(図35)。全四十六帖にさまざまな古器物の模写図が貼り込まれており、そのうち鈴鐸類をあつめた一帖に色摺の本図がみえる。一枚刷あるいは版本の一葉とみられる。器形は⑯とほぼ同じと思われるが、柄の楕円形の凹みに「天平勝宝年」(七四九〜七五七)の銘があり、また鈴部上半は六面ではなく八面以上に見える。

(6) 楕円形鈴

横山由清(二八二六〜七九)による『尚古図録』(明治九年(一八七六)刊)に「福羽家蔵」の驛鈴として紹介される(図36)。およそ三寸一分(約九・四cm)の楕円形で、両面にそれぞれ「驛鈴」の文字、背面にはさらに「寛元五年」の銘があらわされる。同じ年紀を入れた同類と思われる鈴が複数伝来しているものの「清野・金野二〇〇九」、今のところ江戸時代の資料に収録されたものはみない。

(7) 鳥形鈴

尾張国海東郡木田村の国学者・大館高門(一七六六〜一八三九)所蔵品が著名で、『集古十種』に掲載され、古鈴図録にもしばしば収録される。鳥形に作った鈴の上部に環状の鈕を設け、胴部左側面(表)に「松浦社神宝」、右側面(裏)に「天平十紀戊寅九月」の銘を入れる(図37)。西尾市岩瀬文庫『駅路鈴考』に付属する古鈴図録には「守屋昌綱云く、大館高門蔵古鈴必ず信ずべからず、是伊勢安濃津福田某偽造也」と記す。

守屋昌綱とは伊勢内宮にある風日祈宮の大内人職であった守屋徳大夫と磯部昌綱のことで、本居宣長はじめ国学者らとの交流も知られる。宣長の門人であった大館高門とも面識があった可能性が高く、興味深い情報である。なお、遷幸行列がおこなわれた寛政二年、高門は本鈴を携えて京都にいた。親交のあった伊勢内宮の神官・荒木田末偶（一七三六～一八〇二）の歌集『菊能家集』（寛政九年）に、

おなし年新内裏遷幸をかみのほりけるをりの、双林寺の哥つとひに、をはり人大館高門かもとめえつるいとふるき鈴をもちきて、みやひをたちに哥こひけるときよめる、

とあり、東山の双林寺で催された歌会にてこの鈴を詠むことをリクエストされたという。

また、『駅鈴記』（京都大学文学研究科）付属の古鈴図録には、「小石川伝通院前町金物店 堺屋弥右衛門蔵古鈴 図」としてよく似た鶏形の鈴を掲載する（図38）。こちらは胴部左側面に「松浦神鈴」、右側面に「文

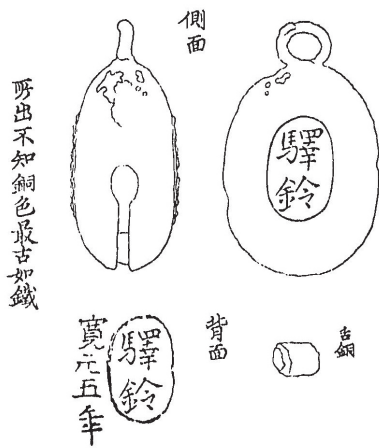


図36 福羽家蔵鈴図（『尚古図録』国立国会図書館）

永元年」（一一二六四）と入れる。「質銅、背より尾まで横の長さ三寸五分（約

一〇・六cm）、胴の縦一寸六分（約四・八cm）」とあり、さらに「江戸小石川白山権現境内の八幡宮神室の古鈴鶏形にて此鈴と全く同じ物にして、文字もかハる事なしと大竹昌言いへり」と記す。

橘南谿『北窓瑣談』卷三には、

又天明年間河内国より掘出したりとて、青き銅の鶏の形したる鈴、京へ持上りて売し人の有けるに、並河（尚誠）氏、伏見の宮に御覽に入奉りしに、是は我家に無くて叶はざるものとして、価を下されて召れしとぞ、並河氏後に物語なりき。宮には何の御用にか有らん。

とあり、天明年間に河内国にて出土した青銅製の鶏形鈴が京都で売りに出され、並河尚誠が仲介して伏見宮（邦頼親王または貞敬親王）が購入したとする。

並河尚誠（一七七一～一八一）は字を叔明、通称を誠輔といい、巨川と号した儒医で、並河誠所の弟・天民の孫として生まれた「羽倉一九六六」。文化初年に大坂から京都へ移り、伏見宮の侍読を勤めたという。大坂懐徳堂の四代学主・中井竹山の季女とのあいだの子・寒泉（朋来・鳳来）は懐徳堂最後の教授として知られる。

なお、尚誠もまた古鈴を所有していたらしく、『北窓瑣談』に記されている。

並河誠輔所蔵に古き鈴あり。其質は鉄と見え、大きは橘の大きなもの程にて、全体丸き中に隠々として八角の稜あり。下に普通の鈴のごとき長さ音穴あり。又肩の所に赤小豆程の小穴を左右に穿てり。今の製とは頗る古質也。

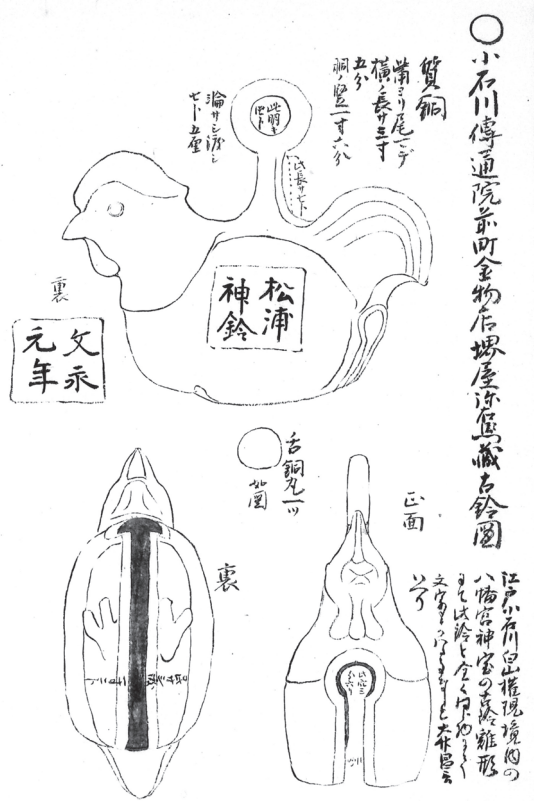


図 38 塚屋弥右衛門蔵鈴図(『駅鈴記』京都大学文学研究科)

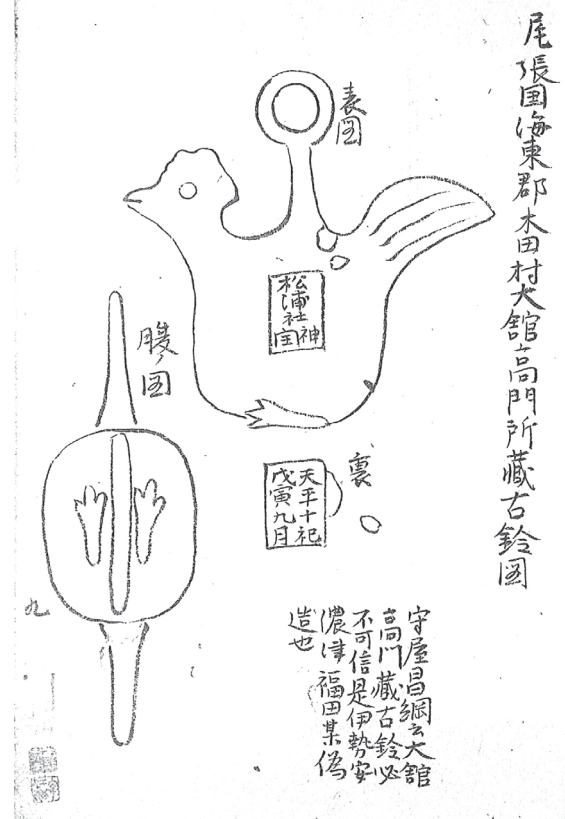


図 37 大館高門蔵鈴図(『駅路鈴考』西尾市岩瀬文庫)

タチバナの実ほどの大きさであるから直径三cmほどで、丸みのある八角形となるよう稜を設けた鈴であった。肩に小豆ほどの小孔が二か所にあるといい、鑄造時に外型と中子のすきまを保持するための「型持たせ」の痕跡かもしれない。古墳から出土する馬鈴に見られる形状と思われ、鉄製とあるのも共伴していた他の鉄製品の痕跡が付着した可能性があるう。

鳥形鈴の事例を三つ挙げたが、これらについては駅鈴と明記された資料は未見であり、樋畑氏が何を以て駅鈴に分類したのかはわからない。本稿では楕円形鈴とともに、江戸時代に駅鈴とされた古鈴からはひとまず除外しておく。

以上、おおまかに分類しつつ江戸時代に駅鈴と考えられた古鈴の模写図を紹介した。これらの駅鈴が世にあらわれた時期、あるいは模写図の初現について、関連する事項とともに年表にしてまとめたのが表2である。まず十八世紀はじめに六稜鈴があらわれるが、当時はあまり注目を集めなかつたようにみえる。転機となるのは徳川吉宗の調査により鹿嶋正等寺の三鈴鏡が駅鈴とされた享保年間で、享保二十一年(元文元年)には上覧もおこなわれた。その後も吾嬭神社神宝鈴や松峰寺跡出土品が駅鈴と考えられるなど、三鈴鏡の形式を駅鈴とする説が根強く残った。好古や古器物考証における吉宗の重要性はかつて述べたところであるが「川見二〇一六」、さまざまな面で古制を探ろうと動いていることが駅鈴の調査からもわかる。江戸時代に考証学が活発化する契機として吉宗の時期が重要であることがあらためて認識できる。

そして、好古の潮流が盛り上がりを見せる十八世紀後半に隠岐駅鈴が出現したことで、駅鈴に対する関心が一気に高まりを見せる。情報交換

表2 駅鈴図関係年表

| 年 | 西暦 | 事項 | 関連する鈴 |
|-------|------|---|-------|
| 宝永 5 | 1708 | 雲州の人が所持する六稜鈴が京都で焼失 | ⑥ |
| 享保 17 | 1732 | 林信智、鹿島正等寺駅鈴図の賛を記す | ⑪ A |
| 元文元 | 1736 | 將軍吉宗、鹿島正等寺の駅鈴を上覧 | ⑪ B |
| 寛延 3 | 1750 | 『詹々言』刊行 | ⑮ |
| 天明元 | 1781 | 並河一敬『駅鈴記』、これ以前に西依成齋ら隠岐駅鈴を閲覧、一敬の模写図を広幡前豊に献上、模鑄した鈴を分配 | ① A |
| 天明 2 | 1782 | 村井古巖、西依成齋が持参した隠岐駅鈴（図）を閲覧 | ① C |
| | | 並河一敬、隠岐駅鈴を模写 | ① B |
| 天明 3 | 1783 | 白蓮社空阿、吾孀神社駅鈴を模写 | ⑫ A |
| | | 高橋氏、「隠州一宮駅鈴図」を記す | ① F |
| | | 酒井忠理、鹿島正等寺鈴図を尾崎積興に借りて写す | ⑪ D |
| 天明 4 | 1784 | 伊勢貞丈、『駅路鈴考』を著す | |
| 天明 6 | 1786 | 『空華談叢』刊行 | ⑪ E |
| | | 光格天皇、隠岐駅鈴を上覧 | |
| 天明 8 | 1788 | 村山芝塙、吾孀神社駅鈴を模写 | ⑫ B |
| 寛政 2 | 1790 | 光格天皇、新造内裏への遷幸行列 | |
| 寛政 4 | 1792 | 大塚嘉樹、隠岐駅鈴図を辻蘭室に借りて写す | ① D |
| | | 狩谷椽齋、鹿島正等寺駅鈴図を八木正富に借りて写す | ⑪ F |
| 寛政 6 | 1794 | 吉沢好道、三好官兵衛が所蔵する駅鈴について森長見から情報を得る | ② |
| | | 藤貞幹『好古小録』刊行 | |
| 寛政 7 | 1795 | 將軍家斉、隠岐駅鈴を上覧 | ① E |
| | | 鈴木甘井、出雲国大社神宝駅路鈴図を成沢雲帯から借りて写す | ⑨ |
| 寛政 10 | 1798 | 藤允直、日根野元直が模写した森重都由所蔵駅鈴図に識語を記す | ③ |
| 享和元 | 1801 | 佐竹家に松峰寺跡出土鈴が献上される | ⑭ |
| 文化 12 | 1815 | 栗原信充、『駅鈴考』を著す | |
| 文政 6 | 1823 | 『鹿嶋志』刊行 | ⑪ I |
| 天保 4 | 1833 | 『茅窓漫録』刊行 | ⑪ H |
| 天保 6 | 1835 | 大宰府の西、四天王寺山で駅鈴が出土 | ⑩ |
| 弘化 2 | 1845 | 片山賢、吾孀神社鈴を模写 | ⑫ C |
| 嘉永元 | 1848 | 『柳庵雜筆』刊行 | |

や議論は活発化し、さまざまな形状の鈴が駅鈴の候補とされたのである。このような状況のなか、光格天皇が遷幸行列に用いて隠岐駅鈴に墨付きを与えたことが大きなインパクトを与えたであろうことは想像に難くない。

さまざまな古鈴が駅鈴の候補とされた当時、具体的にどのような考証によって真の駅鈴を明らかにしようとしたのか、まとまった著作を遺した考証家として並河一敬、伊勢貞丈、栗原信充の三者を取り上げ、議論の流れをみておきたい。

三 江戸時代における駅鈴の考証

(1) 並河一敬『駅鈴記』(天明元年八月自序)

第一章にて紹介した序文にあるように、本書は西依成斎とともに隠岐駅鈴を観た並河一敬が模写図を広幡前豊に献上した際、駅鈴の典故を撰述するよう命ぜられて記したものである。序文に続いて「駅鈴図」として隠岐駅鈴の図を掲げ、さらに鹿嶋正等寺の三鈷鏡と『詹々言』所載の環鈴(虎撐)の図を駅鈴の候補として示す。三鈷鏡については、「形穢の如くして頭を鬼面に作り、脚は蟲足の如く、銅を以て造る。伝へて言ふ、此れ常陸国鹿嶋郡正等寺旧伝する所にして、今水戸侯の宝庫に在る也」とする。本鈴が水戸徳川家の所蔵となったことは他にみない。環鈴(虎撐)についてはすでに述べた通りで、松岡玄達『詹々言』の該当箇所も引用する。

続いて、和漢の古文獻から駅鈴に関する史料を列挙する。各史料や全体を通しての考証はあまり記されていないものの、どのような史料を拾い出しているのか順を追ってみておきたい。

まず、『洪武正韻』卷六(明・洪武八年(一三七五))から「鈴」の項を引用する。

鈴、鐘に似て小さく、又円形と為し、半裂して以て声を出す。銅珠を錮ぎ、内に於て以て之を鳴らす。今郵卒帯る所なり。

明代に「郵卒」が鈴を携帯したことを受けて、『広雅』(魏・張揖)「郵は駅也、置も亦駅也」、『風俗通義』(後漢・応劭)「漢、郵を改めて置と為す。置は其の遠近の間を度り之を置く也」、「一に曰く、馬伝を置と曰ひ、歩伝を郵と曰ふ」(『洪武正韻』卷六)と、中国の文献から郵置と駅に関する記述を抜き出している。文献には時代差が大きいですが、中国においても日本の駅鈴に類するものがあつたことを示そうとしたものと思われる。

次に『令義解』から公式令の給駅伝馬条、諸国給鈴条、車駕巡行条を引用し、律令駅伝制における駅鈴の役割、運用を示したうえで、厩牧令諸道置駅条などから次のように補足する。

厩牧令に據るに、三十里に一駅を置く。今按ずるに五里に当たる。所謂十駅、六駅以上を以て一日駅を取るの行程也。駅毎に各乗り易るべし。

駅鈴十尅は馬十疋を出し、各駅子一人を加ふ也。伝符三十尅は人夫三十人余りを出し之を效す。

そして大化改新詔のほか、『続日本紀』から八世紀に駅鈴が諸国へ配備・支給された例として、養老四年四月乙亥条(常陸、遠江、伊豆、出雲)、

同年五月乙亥条（伊豆、駿河、伯耆）、天平四年九月丁卯条（節度使に
駅鈴各二口を支給）、天平宝字二年九月丁酉条（越前、越中、佐渡、出雲、
石見、伊予に飛駅鈴一口を配備）を列挙する。さらに藤原広嗣の乱につ
いて記した天平十二年十一月戊子条から、船で新羅に逃れようとしたが
風向きが変わって吹き戻されそうになった広嗣が、駅鈴一口を海に投げ
て風雨を鎮めようとした逸話を引く。

続いて、『令聞書』（一条兼良述、一条冬良記）から職員令の少納言の
職掌「請進鈴印伝符」に関する記述を挙げる。

鈴は駅路のすじなり。君の使にとほく行時鈴をたまひ又官符を給ふ。
其鈴にきざみの数あり。其きざみの数によりて駅路の馬に乗て鈴を
振て遠路を経なり。伝の符と云は伝馬を云ふなり。是符にもきざみ
のかずありて其数によつて伝馬にのる。駅の馬は善馬、伝馬は次の
馬なり。是等の官符鈴印などは少納言奉行するなり。賜ふ時も又返
奉る時によつて請進といへり。

駅鈴・伝符にあるきざみの数にしたがつて駅馬・伝馬を使用すること、
駅馬が善馬（良馬）、伝馬はそれに次ぐ馬であること、少納言がその執
行にあたったことを述べる。

また『延喜式』から三つの条文を引用する。まず太政官式弁官牒式条
は、少納言を通じて天皇への奏上や文書への捺印、駅鈴・伝符の出納を
おこなう際の手続きを定める。

凡そ左右弁官は各入奏并に請印文書及び駅鈴伝符等を請進はる色
目を録して少納言に牒送せよ。少納言外記は入奏請印及び駅鈴伝符

を請進はること訖るの状を録して弁官に牒せよ。其の式左の如し。
（下略）

次は同伊勢大神宮式駅使条にみえる規定で、神領との境界で鈴の音を
止めるとあることから、駅使は駅鈴を鳴らしながら馬を進めたと解釈さ
れることも多い。

凡そ駅使大神宮堺に入るは、飯高郡下樋小河に到り鈴声を止む。

そして同主税式正税帳条より、諸国から中央へ派遣された駅使に何尅
の駅鈴を何口使用したのかの帳簿上の記載である。

某国使官位姓名費若干尅駅鈴若干口

上下单若干人《目已上若干人、史生若干人、
従若干人、雑掌若干人》

その次に取り上げる『内裏儀式』少納言尋常奏式も駅鈴・伝符の請進
に関わる手続きである。

（上略）少納言就位奏曰、太政官奏〈久〉某国某使等〈乃〉進〈礼
流〉若干尅〈乃〉鈴若干口若干尅伝符若干枚進〈止〉申、敕曰取之、
称唯、又云、某事〈爾〉縁〈弓〉某国某人〈爾〉給若干尅鈴若干口
若干尅伝符若干枚官符若干枚合賜〈流〉鈴若干口伝符若干枚官符若
干枚〈爾〉印賜〈止〉奏、敕曰取之、（下略）

ここで再び中国の文献から『経世大典』(元・趙世延ほか)と『大明会典』を取り上げる。

凡そ文書往来、卒革帯を腰して懸鈴・手槍を帯び、襷袢を挟みて文書を費し以て行き、夜は則ち火炬を持つ。道狭く、車馬の者、荷を負う者、鈴を聞かば則ち遙かに諸旁に避け、夜は亦以て虎狼不若を驚かす。又響所に及ぶの鋪、則ち鋪人出て以て其の至るを俟つ。

(『経世大典』)

公文の通送、照して古法に依るに、一昼夜一百刻を通じて、三刻毎に一鋪を行き、昼夜須らく三百里を行くべし。…昼夜を分つこと無く、鈴を鳴らして走通す。前鋪鈴を聞き、鋪司預て先に鋪を出て交収す。(『大明会典』卷一四九)

どちらも文書の往来・通送において鈴が用いられたことを記しており、はじめに取り上げた『洪武正韻』等の記事と関わるものとみられる。

天皇の崩御や讓位、政変などの非常事態に際して、三関と呼ばれた伊勢国鈴鹿関、美濃国不破関、越前国愛発関(後に近江国逢坂関)を封鎖して通行を禁じる固関がある。ここでは『江家次第』固関事から、固関に際して伊勢国司等へ発給される太政官符の書式に、勅符を運ぶ使者に駅鈴が支給されることになっているため引用する。『江家次第』が編纂された平安後期にはすでに三関の実態はなく、したがって固関も儀礼化していたとみられるが、讓位にもなう固関の実例として『玉葉』治承四年二月二十一日条、『秀長卿記』応安四年(一三七一)三月二十三日条を挙げる。

つづいて延喜諸陵寮式から、毎年十二月におこなわれる陵墓への奉幣に際し、事前に幣物と派遣される使者の名前、支給する駅鈴の数を所管する治部省へ届け出る規定を示す。

同月(十二月)上旬、幣物数并に伊勢、近江、紀伊、淡路等国使名、及び鈴数を録して省に申せ(『国別二尅駅鈴一口、位の高下を限らず』)。

また延喜神祇式踐祚大嘗祭の神服条に、大嘗祭に奉る神服のうち、和妙(にぎたえ)のための絹糸を手配するために、神服社の神主が参河国へ派遣される際に駅鈴が支給されることになっている。

凡そ神服を織るは、九月上旬、神祇官、神服社神主一人を差し、駅鈴一口を給ひて参河国に遣す。

これらも駅鈴が支給される事例として挙げたものとみられる。

『北山抄』から、養老職員令の少納言および主鈴の職掌である「進付飛駅鈴函」について「集解云く、飛駅乗馬、中務南大庭に至て鈴を振る。

登る時、少納言及び主鈴共に受けて進むと云々」とある部分を引く。

『禁秘抄』大刀契条より、駅鈴が六角あるいは八角であるとの記述を取り上げる。

『源平盛衰記』朝敵追討例付駅路鈴事から、嘉承二年(一一〇七)十二月、平正盛が源義親追討のため出雲国へ向かう際、鈴のみを下賜されて革袋に入れて首に懸けたという逸話を載せる。

和漢の詩文を取り上げる。まずは『佩文韻府』から唐・韓偓の「早發藍関」(『全唐詩』卷六八二)に見える「駅使鈴」を引く。

路盤暫見樵人火 路盤暫く樵人の火を見る
棧転時間駅使鈴 棧転の時駅使の鈴を聞く

『和漢朗詠集』(五〇二)からは唐・杜荀鶴の「秋宿臨江駅」(『全唐詩』
卷六九二)に「駅路鈴」の語が見える。

漁舟火影寒焼浪 漁舟の日の影は寒うして浪を焼く

駅路鈴声夜過山 駅路の鈴の声は夜の山を過ぐ

次に和歌では、『類題和歌集』雑「むまや」から「駅家(うまや)の鈴」
を詠んだ衣笠家良、藤原為家、三条西実隆の三首を引用する。

旅人の山こへわふる夕霧にむまやの鈴の音響くなり 衣笠前内大臣

道細き関のむまやのすゝか山ふりはへ過る友よばふなり 為家

神もさそふりくる雨は篠つかのむまやの鈴のさよ深き声 道遥院

続いて、上覚(一一四七〜一二二六)の歌論『和歌色葉集』から、『堀
河百首』「関」大江匡房の一首に關する一文を引用する。

相坂の関の関守出て見よむまやつたひの鈴きこゆなり

むまやつたひの鈴きこゆとは古詩に駅路鈴声夜過山云々、官使のゆ
きてやどるところを駅路といふなり、官より鈴をたまはりて、それ
をするしにて、むまやにつくごとに、ふりならしてやどるなり、国
主七鈴をもて七道へ遣はずには、官使に一つづゝたまふなり、七鈴
の内に一には口のかけたる鈴あり、それを給はりたる使は道の間に

てよろづにつけて物あしといひ伝へたり。

「駅家伝ひの鈴聞こゆ」を駅家に到着するたびに駅鈴を振り鳴らして供
給を受けたと解釈する。また、七道に派遣する官使に給う鈴のうちに一
つ口の欠けたものがあり、これを支給された使者は道中に災いがあると
の伝承を記す。

最後に『東海道駅路の鈴』(宝永六年刊)を取り上げる¹⁵⁾。ここに駅路
の鈴について、「今はなへての馬ども付なり」とあるのに対して、一敬
は通常の馬に着ける鈴は「めなし鈴」であつて駅鈴ではないとの私見を
記す。

一敬按ずるに、なべての馬につけたる鈴を見ればみなめなし鈴にて
駅鈴にはあらず、貝原翁もまことの駅鈴を見ずして伝聞について書
たまへるにや、

以上見たように、一敬は日本だけでなく中国の文献も引用して、駅鈴
の制度的な位置づけを明らかにしようとしている。しかしながら、史料
の順序は必ずしも整つておらず、具体的な考証や結論も示されていない
ため、その真意は明確でない。

(2) 伊勢貞丈『駅路鈴考』(天明四年二月八日)

幕臣・伊勢貞丈(一七一八〜一八四四)は幼名を万助、通称を兵庫、平蔵
といい、安斎と号した。室町幕府政所執事であつた伊勢家は礼法に通じ、
貞丈も武家故実の第一人者であつた。本書は隠岐駅鈴の出現を受けて古
代駅鈴の實際を明らかにしようとして著されたとみられる。文献から関連史

料を引用し、ところどころに貞丈の注釈や考証を記す。以下、引用する史料と貞丈の考証を紹介するが、一敬『駅鈴記』と重なる史料は具体的な内容を省略する。

『令義解』職員令中務省条より主鈴の職掌、公式令の給駅伝馬条、諸国給鈴条、車駕巡幸条、職員令より少納言の職掌を引用する。少納言と主鈴の駅鈴に関わる具体的な役割について貞丈は次のように述べる。

鈴契伝符以下の物を賜ふ時は太政官より其事を仰すれば、中務省承けて主鈴に仰せて其事を奉仕せしむ。少納言は其場にて其事を監視す。

『令聞書』は一敬と同じ箇所であるがより広い範囲を引用したうえで、次のように考証する。

貞丈案に、右聞書に駅鈴の剋数も伝符の剋数も共に馬の数とし、善馬、次の馬の差別ありとす。然らば人夫の数をば何に依りて定めんや。是は義解の駅子伝子の文義を見誤れる也。或説に駅鈴十剋は馬十疋を出す、各駅子一人副ふ、伝符三十剋は人夫三十人を出す、伝子は也。余は是に倣へと云へり。此の説善し。又聞書に書函に鈴大契(伝符なり)などを入れて給ふとあるも誤也。令にも式にも見えず。延喜木工寮式に飛駅函の寸法あり(左に記す)。大なる筥に非ざれば、書簡と鈴と伝符と三物は入れがたかるべし。且又延喜内記式に飛駅函を封ずる事あり(左に記す)。鈴伝符を函に入れて封じたらば取出す事ならず、駅舎に至りて何を證にして人馬を出さしめんや。函には勅符の文書を納れて固く封じ、別に駅鈴伝符を相副へて給はる

を飛駅函鈴と云ふ也。

まず『令聞書』が駅鈴、伝符の剋数はどちらも馬の数を示し、駅馬を善馬(最も優れた馬)、伝馬を次の馬(善馬に次ぐ馬)とするのに対して、それでは人夫の数がわからないため、駅鈴十剋は馬十疋にそれぞれ駅子一人を副える、伝符三十剋は人夫(伝子)三十人を出すという「或説」の解釈を是とする。次に、書函に駅鈴・伝符を納めて発遣するとの解釈について、延喜式に規定される飛駅函の寸法は鈴を納められる大きさではなく、また駅鈴を函に入れてしまつては駅馬を利用する証として使えないため、函には勅符のみを入れ、別に駅鈴・伝符を副えるとした。そして「左に記す」とした史料を掲げる。

飛駅函《長一尺一寸六分、広三寸、深二寸三分》(延喜木工寮式)

凡そ飛駅并に駅伝函及び渤海国に遣わす勅書、太政官牒は主鈴これを封ず。(延喜主鈴式)

凡そ在外官飛駅事を奏するは、大臣奏畢らば、即ち内記勅符を作らしめ、大臣自ら持て殿上に昇り奏覽畢ぬ。少納言、中務輔、内記、主鈴等請印、函を封じて発遣す。(延喜内記式)

さらに補足として、同中務省式および並河一敬も取り上げた『内裏儀式』少納言尋常奏式を引用する。

凡そ在外官飛駅奏する事は、大臣奏畢、即ち内記に勅符を作らしむ。

大臣自ら持て殿上に昇り奏覽畢。少納言、中務輔、内記、主鈴等請印、函を封じて発遣す。(延喜中務省式)

また、『続日本紀』延暦八年(七八九)四月乙酉条「是より先、伊勢、美濃等関例、上下飛駅函、関司必ず開き見る。是に至り勅すらく、自今以後輒く開くを得ざれ」を引いて、「此文を見て函中に駅鈴伝符を雜納せざる事を考ふべし」と述べる。

『百練抄』治承四年九月二十二日条にて平維盛に駅鈴を支給した記事を引き、『盛衰記』には鈴を革の袋に入れて人の頭に懸けさせて下りたる由見えたり」とする。

『禁秘抄』大刀契条を引用し、駅鈴を「或六角或八角」とする説を次のように批判する。

後代に至りては鈴を唯宝物にして固く鎖し置きて出し用ふる事なき故見たる人なし。されば俊実・通俊等も鈴の事は見ずして、其の制形を伝へ聞きたるのみなる故、六尅八尅を六角八角と伝し誤れり。尅と角と音相似たる故紛れたる也。

俊実、通俊らは鈴を實際に見たわけではなくその形を伝聞によって知つたため、「尅」を「角」と聞き誤つたとし、駅鈴の形状について次のように見解を記す。

隱岐国造が家蔵の駅鈴の図を見るに、六角にして其の腹背に駅鈴の二字を篆書して鑄付けたり。其の六角にしたるは、右の俊実通俊が説に依りて造れる也。又駅鈴の二字を付けたるは却りて疑はし。且

尅数なし。其の作者、唯禁秘抄のみを見て公式令、内裏儀式等をは見ず、尅数ある事を知らずして妄作せる者なり。

貞丈が見た隱岐駅鈴図は並河一敬による①A B、または西依成斎・村井古巖による①Cであった可能性が高いが、あまり正確でなかったように、八角を六角と誤っている。ただいざれにしても貞丈は、隱岐駅鈴に「駅鈴」の文字が入っているのはかえって疑わしく、肝心の「尅」が無いことをもってこれをしりぞけ、養老令や内裏儀式などを知らずに『禁秘抄』のみを見て作った偽物であると結論付けた。

次に『万葉集』卷十八(四一一〇)より天平勝宝元年五月十七日に大伴家持が詠んだ次の歌を引用する。

先の妻、夫の君の喚使を待たず、みづから来りし時に作る歌一首

左夫流児が齋きし殿に鈴掛けぬ駅馬下れり里もどろに

(左夫流児が大切にしている御殿に、鈴をつけていない駅馬が下つて来て里中が大騒ぎになった)

家持は当時越中国司として赴任しており、部下の一人である史生・尾張少昨が都に残してきた妻がいるにもかかわらず現地の遊女に入れあげ、国府にもその家から出勤するありさまであった。家持の度重なる説得を受けて都から妻を呼び寄せることにしたところ、その返信を待つ間もなく、妻本人が馬に乗って遊女の家に乗り込んだという逸話を詠んでいる。

この歌に対する仙覚の解釈を『仙覚律師抄(万葉集註釈)』(文永六年(一二六九)から引用する。仙覚は「すゞかけぬはいま(鈴掛けぬ駅馬)」

について、「官使のゆきて宿する所をば駅路といふ。ハイマヂとよむなり。官より鈴を賜はりて、それをしるしにて駅へゆく。鈴をふりならしめて宿する也」とする。

『堀河院百首』（一四一〇）より大江匡房、『堀河次郎百首（永久百首）』（三二四）より藤原仲実の二首を引用し、「むまやは駅舎なり、鈴は駅路の鈴をいふなり」とする。

相坂の関のせきもりいで、見よむまやつたひに鈴きこゆなり 匡房

あつまぢの不破のせき屋のすぢむしをむまやにふるとおもひけるかな 仲実

以上の史料を引用したうえで、貞丈は駅鈴の形状について次のように結論付ける。

公式令、内裏儀式等の所見、駅鈴には必ず尅数有り。古書に其の制形を図せし者を未だ見ざれば詳ならず。今世此尅彼尅に駅路鈴と称して蔵する者希に有れども、其の制形各同ならず、且尅数も無し、信じ難し。唯下総国葛飾郡吾嬭神祠と常陸国鹿嶋郡正等寺と此両尅に蔵する者、其制形大に同くして少しく異也。其の形状蝌蚪の後脚を生じたらんが如くにて、其の背腹に眼・耳・鼻・口ありて鬼面に似たり。其の柄に尅数と謂ふべき者あり。其の体吾が朝の人の意巧より出つべき者とは見えず。思ふに上古吾が朝家の制度儀物唐朝を模擬せられしかば、駅鈴も亦唐制を摸せられしにや。彼の両鈴、共に大に同じけれども少しく異なる所あるは造作の時世にも依る歟。

古き官家の文書を見るに、天子の御印を捺したるあり。其の文字天皇御璽の字様曲直肥瘦少異あり。官印亦然り。是れ時世に依りて少異ある也。彼の両鈴の少異も亦其の類歟。彼の鈴尅数と謂ふべき者あれば、是れ其の真物にもやあるらん。

当時駅鈴と称するものがいくつか存在したが、それぞれに形状が異なっており、駅鈴にあるはずの「尅」も無いことからこれらは信じるに値しないとす。そして吾嬭社および鹿嶋正等寺の三鉈鏡の柄にある横方向の条線を「尅」と考え、古代駅鈴の真物ではないかと推測し、二つの三鉈鏡における形状の違いは製作時期の差と考えた。そして、空阿による吾嬭社三鉈鏡図および林信智の識語のある鹿嶋正等寺三鉈鏡図を掲載し、柄の刻線にそれぞれ「是尅数歟」「此筋上中下合て五つ、是尅数歟」と記す。

貞丈は日本の文献を中心に各史料の解釈を積み上げて駅鈴を理解しようとし、書函に駅鈴も納めて支給するとの『令聞書』の説に対して、それでは駅家で利用証として見せることができないと批判するなど、首肯できるところが少なくない。そして「尅」の有無を最も重視した結果、隠岐駅鈴ではなく三鉈鏡を真の駅鈴と考えたのである。隠岐駅鈴に「駅鈴」の文字が入っていることがかえって疑わしいとの指摘も鋭い。ただし、現在の研究からすれば三鉈鏡を駅鈴とすることは難しい。『禁秘抄』に駅鈴の形状について「或六角或八角」とあるのを「尅」と「角」を聞き違えたとして否定するなど、やや強引な論も目につく。

（3）栗原信充の駅鈴考証

栗原信充（一七九四～一八七〇）は幼名を陽太郎、字を伯任、通称を

孫之丞といい、柳庵と号した故実家である。屋代弘賢、平田篤胤から国学を、柴野栗山から儒学を学び、弘賢による『古今要覧』編纂にも参加した。『甲冑図式』『刀剣図式』『弓箭図式』『武器袖鏡』『兵家紀聞』『装劍備考』など武家故実に関する著作が多い。

信充は『柳庵雜筆』（弘化二年自序、嘉永元年刊）において、『日本書紀』大化改新詔や養老令の規定を引用し、「然らば駅鈴の剋数は十剋・八剋・六剋・五剋・三剋・二剋の六品と知へし、余觀者三種」として、①「隱岐国造家藏駅鈴」、②「讚岐国多度郡陶村三好氏藏駅鈴」、③「六稜駅鈴禁秘抄所載物」、そして④「六稜駅鈴 高橋図南摹本」の四図を掲載する（丸数字は第二章における駅鈴図の分類と対応）。

隱岐駅鈴は「村井教義及び藤貞幹の本、信州上田成沢寛経の校本を以て図す」とあることから、①C、①Dおよび成沢寛経校本を勘案して作成したとわかる。

三好氏藏鈴は「成沢寛経校本には、三好官兵衛藏、質銅隱岐国造藏と同しくして、たゞ大小の違のみと云り。裏面に鈴字あり」として八稜鈴を、「或家藏本讚岐国多度郡陶村三好氏藏駅鈴」として擬宝珠形ものを掲載しており、これも成沢氏の校本を参照している。「信充云、大小同しからぬは刻数の異なるか故なるへし。一本は自別種にや、其実をしらす」と記し、隱岐駅鈴と大きさが異なるのは、剋数の違いによると解釈した。

六稜鈴も成沢寛経校本からの転写で、「禁秘抄に鈴印同、俊実・通俊曰、件鈴太有興物也、或六角、或八角云々と見也、六角とは六稜の謂なるべし、八角は八稜にて前の図の如きならん、好古小録に六稜鈴、梨木三位摹本世に伝はると云者是なるへし」「梨木本大如図」とあり、本図を貞幹『好古小録』にいう「梨木三位の摹本」とするが、この点については

すでに述べた。そして、「高橋図南摹本六稜鈴と通考すへし」として⑥の図を掲げる。

以上三種皆駅路鈴と云。殊に駅鈴の銘あれば更に疑べくもあらず。然るを葛飾の吾孀森の神社の神宝なる鈴や常陸国鹿島正等寺の古鈴などを駅鈴なりと云は如何あるべき。禁秘抄に六角・八角と云にも合はず。猶委くは信濃人成沢寛経の鈴志に出れば爰に略せり。

これらの鈴について、「駅鈴」の銘があれば疑いようもないとする一方、三鉗鏡については『禁秘抄』の六角、八角という記述にも合わず疑問を呈する。ただ、詳しくは成沢寛経『鈴志』に記述があるとしてこれ以上の説明を省いている。『鈴志』は目にすることができていないが、より詳しく信充の考証を知る手がかりとして、西尾市岩瀬文庫所蔵の『駅鈴考 草本』と東京国立博物館の『鈴図集』がある。

前者は外題に「駅鈴考 草本」、内題に「駅鈴考」とあり、「文化十二年冬十月二十日草 源信充」の奥付を有する。信充が古代の駅鈴について考証したもので、『柳庵雜筆』よりも詳しい記述がみられる。冒頭に考証の結論を述べ、次いで『日本書紀』、『続日本紀』、大神宮儀式、養老などから駅鈴関連史料を列挙するとともに、駅鈴とされるものの横写図を掲載する。冒頭部分は次の通りである。

公式令云、凡在京諸司有事須乘駅馬者、皆本司申大政官奏給、義解謂、神祇官依幣帛、宮内省依御贄、乘駅之類也と云うは、朝廷より国々に公使を下す時は必本司より太政官に申して駅馬を給するなり。其時官より給する鈴を駅鈴と云。其起は孝徳天皇大化二年より也《日

本紀に出》。然れども国々より京都へ上奏する寸も駅鈴を執て往来すると見えたり《続日本紀に国々へ駅鈴を賜しことあり》。其鈴は大小ありと見えたり。隱岐国造か家に伝え来しものを正しと云。面形にして柄あるものは神宝に備えしものと見えたり。蓋使者往来する時官より駅子《駅馬に先立て鈴をふりながら行ものゝ如く見ゆ》を給て先行せしむ。駅家より馬を伝て送るなり《駅は厩牧令に依に諸道須置駅者、每卅里置一駅、又云、諸道置駅馬、大路二十疋、中路十疋、小路五疋》。然とも神領にしては鈴の口を塞と云《大神宮式云、凡駅使入大神宮堺到飯高郡下樋小河止鈴声、江次第云、下樋小河或云停鈴声神領与国領之界也と見ゆ》。下の太神宮儀式に見たと参考すへし。

信充は隱岐駅鈴を真とし、三鉈鏡は神宝であるとしてこれを退ける。また、駅使が各駅家で供給される駅子について、鈴を振りながら駅馬に先行すると解釈した。

収録される模写図は次の六図である（丸数字は第二章における駅鈴図の分類と対応）。

- ① 「隱岐国国造家藏駅鈴図」
- ② 「讃岐国多度郡陶村三好氏所藏駅鈴図二」
- ⑦ 「或家藏駅鈴図」六稜鈴
- ⑨ 「出雲国大社神宝駅路鈴」
- ⑫ 「下総国葛飾郡吾孀神社所藏駅鈴図」
- ⑥ 「雲州之人所持駅路鈴」

①は村井古巖によるC、⑫はAの正面図とBの側面図を写す。また⑨には「信州上田成沢雲帯所図」とある。このうち⑫について次のような考証を加える。

信充曰、駅路鈴は先に載る所の隱岐国造所藏の物を以て正しとすへし。吾孀社に伝るもの及常陸鹿島正等院の神前宮より出たるとて享保廿一年四月江戸へ上りし駅路の鈴、武蔵豊島郡四谷子安稻荷社神宝駅路鈴、皆大同小異なり。是器は蓋駅伝符契の用にあらず。出雲国大社所藏の鈴も同く符契の用にはあらて神前の用器なるへし。村山緯か鈴の柄にある刻数、伝馬を給する多寡ありと云は信しかたし。式に見たる刻数は伝符にあることにして鈴にあることにはあらず。鈴は駅子の持て鳴し行ものなり。朝廷の符契を容易に使者の身を放へきにあらず。是を以て考へし。刻数は伝符にありて使者の執るへきことなるを、駅子の持ものは鈴のみなり。且鈴に刻あらは出雲国大社の藏鈴には何か故に刻の無や。正等院の鈴は上下に四筋のみあり。刻数にせし者とは見へず。子安社の鈴には一筋あれと形容にのみせしものなり。猶此外にも有ぬへし。

あらためて隱岐駅鈴が真であり、吾孀社、鹿嶋正等寺、四谷子安稻荷社などの三鉈鏡は駅伝制に用いたものではなく、出雲国大社鈴も「神前の用器」とする。そして三鉈鏡の柄にある条線が尅とは考えにくいとしたうえで、尅数は伝符（伝馬の利用証である伝符ではなく、駅使が持参する文書に官符を指すか）に記されるので駅鈴自体にはない、駅鈴は駅子が持つて振るものであるから符契としての役割はないとした。『柳庵雑筆』の記述を勘案すると、駅鈴そのものに尅はなく、大小の差がある

と考えたようだ。

三鈷鏡を駅鈴ではないとしたことには首肯できるが、尅数は官符に記載されるから駅鈴にはないとする解釈には無理であろう。信充も参考史料として掲げている養老公式令に「駅伝馬を給ふは鈴伝符尅数に依れ」とあり、『続日本紀』には諸国に支給した駅鈴について「〇尅」と明記しており、使用される以前の駅鈴自体に定まった「尅」があったことは動きがたいと思える〔坂本一九二八〕。

⑥に関する信充の見解は第二章で見た通りで、「形製は或家蔵の駅鈴とやゝ似たり。されと駅鈴の二字もなきと見えたれば、形の似たりとて駅鈴とも云かたけれど」と述べ、『柳庵雑筆』と同じく、鈴にある「駅鈴」銘を決め手と考えている。

東京国立博物館が所蔵する『鈴図集』は外題に「鈴図集」とあり、内題や序文、奥付等はない。枠を肉筆で描き、版心の下段に「柳庵」と記す。また冒頭に「栗原家蔵」の印記があることから、栗原信充によるものと考えられる。内容は「諏訪上社神宝 八栄鈴」「同 御宝鈴」をはじめとする古鈴図とこれらに関連する文献史料の抜き書きや伝聞の覚書きから成り、そのうち駅鈴は十二図を収録する（表1参照）。

三鈷鏡の図は『柳庵雑筆』にはなく、『駅鈴考』にも吾嬬神社鈴図しか掲載されないが、ここには鹿嶋正等寺鈴を四種、吾嬬神社鈴を二種収録する。しかも正等寺鈴の一図には「依元様」とあり、第二章でも述べたように、実見のうえで模写したと思われる。編集時期は不明であるものの、『駅鈴考』の前提になる資料としてまとめたとすれば、三鈷鏡についても各種の模写図を収集したうえで、考証の結果として古代の駅鈴ではないと考え、ほとんどを省いたのであろう。

おわりに

文化八年に刊行された『催馬楽奇談』（小枝繁戯作、蹄齋北馬画）は、『源平盛衰記』鹿谷密謀に舞台を設定し、浄瑠璃『恋女房染分手綱』を翻案した読本である〔徳田・横山一九九二〕。その見返しには鹿嶋正等寺の三鈷鏡をデザインし、自序に続いて隠岐駅鈴図（①C）を見開きで描く。さらに丹波与作をはじめとする登場人物の姿を描いた八枚の挿絵をそれぞれ隠岐駅鈴の側面展開図で縁取り、その上に大館高門所蔵の鳥形鈴、行徳善照寺の五鈴付杏葉、河内金剛寺の四環鈴、出雲大社の駅鈴（⑨）、但馬生野銀山出土の三環鈴、河内金剛寺の六鈴付S字状鑣轡、武州崎玉郡清水村出土の三鈴付杏葉、上総周准郡貞元村貞元親王墓の五鈴付杏葉をあしらう。次に、

昔与作といへる馬夫ありけり。それがことを作ものせし演史を恋女房染分手綱といへり。そをまた翻案しつる物語なれば、馬夫のことに因て催馬楽奇談とは題せり。されば催馬楽の歌の題をもて編次の号とし、古き駅鈴の図を出せり。彼与作はいつの頃の人といふをしらねど、駅路に名高き戯男にやありけん、伊達の与作とは異名せり。

とその理由を述べる。これらの古鈴は本稿で取り上げた古鈴図録に頻出する品々であり、なかにはこの『催馬楽奇談』から写し取った図もあることに気が付いた。たとえば国立公文書館内閣文庫『古駅鈴図及古来鈴之図』（表1 No.5）の図はすべて本書からの転写とみられ、隠岐駅鈴図に捺された蔵版元・田辺屋太兵衛の「雄飛閣記」印までも写し取っている。当時の古鈴愛好が一部の考証家や好事家だけに留まるものでなかつ

たことが窺える。

隠岐駅鈴を古代の駅鈴と主張した樋畑雪湖の研究を滝川政次郎は否定し、真の駅鈴の形態について、まず首に懸けられる程度の大きさの球形で、線状の隆起もしくは溝とした刻み目「尅」があり、「駅鈴」などの銘はなく、もしあるとすれば「勅」字であろうと推定する〔滝川一九六三〕。和漢の文献・文化に精通する氏の歴史観に裏打ちされた説であり、現時点の筆者にはその当否を論じることはできない。ただ『禁秘抄』の六角、八角という記述にしばられる必要はないといっても、少ないながらも前号で紹介したような八稜形の銅鈴が後期古墳から出土していることから〔馬淵二〇二一〕、駅鈴が球形であったとは限らないであろう。これらが古代の駅家近くから出土する傾向から、駅鈴の前身とする指摘もある〔桃崎二〇一四・二〇一九、田中二〇二〇〕。そもそも駅鈴が鍛造ではなく铸造鈴であったとする証拠もないと思われ、駅鈴の真の姿を知るにはまだ多くの困難が立ちはだかっている。

滝川氏は本稿で取り上げた多くの駅鈴も「好事家の嗜好品」と断じ、そのような品が流通していた例として『天保山名所図会』（天保六年刊）の巻末に古物を偽作、模作する「鹿之家真萩」という店の広告が掲載されており、著者である暁鐘成がその顧問であったとした。実際にこの書を開いてみると、すでに紹介した「寛元年間駅鈴之図」のほか、「隠岐国造家所伝駅鈴」、「河内国交野郡渚村所堀出古鈴」、「出雲国大社所伝駅路鈴」などの図が掲載され、次のような宣伝文句が掲げられている。

因三云、予近頃此隠岐国造家所伝の駅鈴を土を以て摹し、熨斗鎮、風鎮、菓子器、煎茶壺などに作り、鹿の家の雅店にて是を鬻げり。尤軍令にも用ゆる器といひ、且悪魔降伏の器なれば、端午の節の飾

具などにも甚古雅にして潔き品也。閲してめされ侍へるへし。

暁鐘成こと木村明啓（一七九三～一八六〇）は大坂西横堀福井町の醬油醸造家・和泉屋太兵衛の四子で、通称を弥四郎といい、鶏鳴舎、暁晴、氣野行成、繁雄、鴛鴦亭、嬾戲堂、鹿廻家真萩などと号した。戯作、狂歌をよくし、著述のかたわら心齋橋筋博労町にて土産品を扱う「鹿之家」を営んだ。この宣伝文句によれば、彼が作らせたのは金属製ではなく陶製の模造品で、自身が営む鹿之家で土産物として販売されたのである。『茅窓漫録』にも隠岐駅鈴について「その模写を陶器とし間々世にあり」とし、池田玄齋も「近曾この鈴の形をうつして茶壺を製造し、或は風鎮などを製し、好事家の賞玩する事なり」（『弘采録』卷二二）とすることから、同じような商売をする店が他にもあったのかもしれない。

江戸時代にさまざまな古鈴が古代の駅鈴であるとされ、多くの考証家がこれに注目した大きな契機が天明初年頃の隠岐駅鈴の出現と寛政二年の遷幸行列であった。光格天皇は天明六年に朔旦冬至句と新嘗祭、翌年に大嘗会を古制に従っておこなうなど、多くの朝儀や神事を再興したことが知られる〔藤田一九九四・一九九二〇一八〕。このような復古の流れは突然はじまったわけではなく、江戸中期以降、文人趣味の拡がりや清朝考証学の影響を受けて、古制の探求や古器物の考証がさかんになったことがある。駅鈴に関しても、徳川吉宗の命による調査の結果、鹿嶋正等寺の三鈷鏡が駅鈴とされた影響は大きく、その後、高橋宗直をはじめ宮廷周辺でも意識されるようになったことが前提としてある。

遷幸行列では、隠岐駅鈴が列しただけでなく、ながらく廃れていた「大刀契櫃」を復活させていたことが野村玄氏の研究により明らかになった〔野村二〇一七〕。第一章で紹介した遷幸行列図においても、隠岐駅鈴を

納めた「鈴櫃」とともに「大刀契櫃」が加わっている。大刀契とは皇位継承において相伝された三種神器につぐ宝器で、大刀（節刀）と契（関契をはじめとする符契類）からなるとされる〔滝川一九六三〕。研究としては伴信友（一七七五〜一八四六）による『大刀契考』が知られるが、遷幸行列以前の天明五年七月二十一日に大塚嘉樹が『大刀契（附 禁秘抄大刀契条補字解）』（宮内庁書陵部）を著しており注目される。大刀契が一つのものを指すのか、あるいは大刀と契から成るのかを、『禁秘抄』、『百鍊抄』、『世俗浅深秘抄』、『中右記』、『桃華藥葉』、『三箇重事鈔』などを引用して考証している。

文化五年に再興された太政官印（外印）についても、幕府との交渉に入る以前から皇室周辺で再興に向けた準備が進められていた。寛保三年（一七四三）、「官庫」（壬生家の文庫）から「太政官印古様之写」が発見されたのを契機に再興が検討されたが、このときは見送られている〔野村二〇〇八〕。その後、大師流の書家で書博士をつとめた賀茂社祠官・岡本保考（一七四九〜一八一七）が寛政五年六月三日に閑院宮二代典仁親王の第五皇子、つまり光格天皇の兄にあたる妙法院門主・真仁法親王（一七六八〜一八〇五）に宛てた書状に、太政官印再興の際には門弟である一条忠良へ印文の清書を命じて欲しいとの文言がある〔一戸二〇一七〕。実際の再興においては保考が印文の清書にあたっているが、この頃にはすでに太政官印の再興が検討されていることが窺える。これと関連するとみられるのが、宮内庁書陵部が所蔵する藤貞幹『歴代外印鑄造私考』である。寛政六年六月に著され、「醒窩先生古印摹本」、「御厨子所預家所伝摹本」、「宗直朝臣所摹」などから太政官印の模本十二点（うち二点は「後附」として奥付の後ろにある）が収録される。一点の注記には「源孺皮日」とあることから、印聖として知られる篆刻家・高

芙蓉（一七二二〜一八四〇）の所見も記している。

これら光格天皇の復古に関わる古制考証とその周辺についても、機会をあらためて詳しく考えてみたい。

註

- (1) 『駅鈴記』は京都大学文学研究科蔵本を用い、適宜樋畑一九三九掲載のものと対照して校訂を加えた。なお、漢文体を書き下し文にあらためた。以下の引用史料も原則として漢文体は書き下し文にあらためている。
- (2) 富士谷成章（一七三八～七九）。名を成章、字を仲達といい、咸章、北辺と号した。儒者・皆川淇園の弟にあたり、筑後柳川藩京都留守居・富士谷家の養子となる。漢学を淇園に、和歌を有栖川宮職仁親王に学び、国語の文法研究に大きな成果をあげた。
- (3) 樋畑一九三九は隠岐国造家の控記録よりさらに長州萩毛利大善太夫家中、西依成斎、上田市郎右衛門、若狭小浜城主酒井氏にも贈られたとする。天明元年以降にもたびたび隠岐駅鈴の模造がおこなわれたとみられ、たとえば、寛政七年八月十三日、石見浜田藩主の松平康定は伊勢参宮の途中松坂に泊った際に本居宣長を招いて『源氏物語』の講釈を受けているが、これに先立って家臣の国学者・小篠敏を遣わし、隠岐駅鈴を模して铸造した鈴に和歌を添えて贈ったという。
- (4) 宣長のほかにも、伊勢内宮の神官・荒木田末偶や尾張の国学者・大館高門らも上京していることが確認できる（後述）。また、福岡藩士で国学者の青柳種信も遷幸を拝したという「大熊一九三四」。
- (5) 山下一九六五は甲の高さを八・六cmとする。また「一見したところ、使用による磨損がほとんどなく、新品に近い感じを受けた」と記す。
- (6) 松平定信は『集古十種』の編纂にともない家臣らを各地に調査のため派遣しており、讃岐へは寛政八年に広瀬蒙斎、同十一年に大野文泉と僧白雲が訪れている。このときに得た情報にもとづいて収録した可能性が高く、秋田六郷本覚寺が所蔵する白雲の「拓本帳」には讃岐国陶村岡田官兵衛の所蔵品が含まれている「加藤一九九八」。なお『集古十種』の編纂過程については川見二〇一七・二〇一八にて検討している。
- (7) 茅原虚斎は『茅窓漫録』の冒頭に「駅路鈴」の項を設けて駅制の概略を示し、鹿嶋正等寺や河内国長原日蔭明神の鈴（三鈇鏡）、松岡玄達『詹々言』所載の「虎撐」などを紹介する。引用する史料の多くは並河一敬『駅鈴記』と重複しており、これを参照したことが明らかであるが、河川や湖沼を行く「水駅」の制度に言及しているのが珍しい。
- (8) 天理図書館『古器図』所載図はさらに寛政六年十一月六日に秦檜丸が転写したとある「清野一九四四」。
- (9) 『茅窓漫録』も引用するように、『扶桑見聞私記』建久五年（一一九四）十二月二十五日条には駅鈴が鹿嶋明神の神前に奉納されており、その形は柄香炉に似ているという。

神代より相承有し駅路鈴と云は何の御代よりか鹿嶋明神の宝前に有奉納。其形似柄香炉、其音高。昔は賜彼鈴朝敵退治の人持参し、以彼鈴軍兵を指揮しけると云。彼鈴は能悪魔を降伏すと也。

本書は源頼朝の側近・大江広元著に擬されるものの、伊勢貞丈は『安斎隨筆』において偽書であることを指摘する。
- (10) 『春秋左氏伝』襄公十四年に「夏書に曰く、道人木鐸を以て路に徇ふ」とあるのを引用する。
- (11) 『文晁好古紀行』（宮内庁書陵部）所載図によると長九寸五分（約二八・八cm）余、鈴部は三寸二分（約九・七cm）とある。
- (12) 池田玄斎は『弘采録』卷二二に「玄斎古甗を愛すの一癖あり…駅路の鈴等を見れば必凶して蔵せる事也」といい、北越青木氏蔵鈴のほか、出雲国大社蔵鈴、隠岐駅鈴、西海氏蔵駅路鈴の図を載せる。このうち「西海氏蔵駅路鈴」については「西海氏にも一つの駅鈴を蔵せり。鹿嶋の駅鈴に似て大同小異あり」と記すが、三鈇鏡ではなく、柄の付いた猪の目形の環の内側上下に楕円形と桃形の鈴が付く形状である。柄尻の装飾が異なるものの、よく似た鈴が紀伊新宮藩主（紀州藩附家老）・水

野忠央が刊行した『千とせのためし』（嘉永四年跋）に「下総国鈴宮古鈴」として収録される。現在のところ『弘采録』以外にこの形式の鈴を駅鈴とする資料を見ないため、参考に挙げるにとどめておく。なお玄斎は『弘采録』巻一二九に『鹿嶋志』を引用して所載の正等寺鈴図を写すとともに、庄内の地でも隠岐駅鈴を模した偽物を一二目にしたと述べる。また『病間雑抄』巻六九には小寺清之『老牛余喘初編』（天保八年自序、同十四年刊）より隠岐駅鈴の図を転載し、「いつれ隠岐の国のものハ正しき古物なるへし」と記す。

(13) このほか東京国立博物館『鈴図集』には「或人云、山城国岩清水八幡別当田中善法寺に駅鈴三口ありといえり」とあり、石清水八幡宮別当の田中家・善法寺家に駅鈴三点が伝わるとの情報を記しており興味深い。また、鈴木甘井本に「撰津国森宮の宝物駅路鈴と云あり」とある。ただし両者とも模写図や詳しい形状を示す記述はなく、その形式は不明である。

(14) 『駅鈴記』には『広韻』とあるが『広雅』の誤りとみられる。

(15) 並河一敬は貝原益軒の著とするものの、現在は大會根佐兵衛という人物の作と考えられている（『日本古典文学大辞典』）。

参考文献

- 荒川正晴 二〇〇〇 「唐朝の交通システム」『大阪大学大学院文学研究科紀要』四〇
 一戸 涉 二〇一七 「大師流と入木道書―架蔵岡本保考宛妙法院宮真仁法親王書状小考―」『斯道文庫論集』五二
 伊藤 純 二〇一七 「隠岐国駅鈴と光格天皇―歴史の転換をもたらしたモノ―」『大阪歴史博物館研究紀要』一五
 大熊浅次郎 一九三四 「筑前国学の泰斗 青柳種信年譜の梗概」『筑紫史談』六二、筑紫史談会
 大野晋・大久保正 一九六九 『本居宣長全集』一五、筑摩書房
 岡 陽子 二〇〇二 「解題」井上新子・赤迫照子他校『源語類聚抄（翻刻平安文学資料稿）』下、広島平安文学研究会
 岡 陽子 二〇〇四 「源義亮の著述活動―『源語類聚抄』（広島大学蔵）解題補遺―」『古代中世国文学』二〇、広島平安文学研究会
 小川常人 一九七六 「隠岐の駅鈴」『通信協会雑誌』七八一
 小川常人 一九九八 『真木和泉守全集』水天宮、臨川書店
 隠岐島誌編纂係 一九三三 『隠岐島誌』島根県隠岐支庁
 億岐豊仲 一九六九 『隠岐国駅鈴倉印の由来』
 加藤純子 一九九八 「白雲収集による『集古十種』採訪資料について」『定信と画僧白雲―集古十種の旅と風景―』白河市歴史民俗資料館
 川見典久 二〇一六 「享保名物帳」の意義と八代將軍徳川吉宗による刀剣調査『古文化研究』一五、黒川古文化研究所
 川見典久 二〇一七 『集古十種』兵器篇と十八世紀の古武器調査『古文化研究』一六、黒川古文化研究所
 川見典久 二〇一八 「『集古十種稿』の分析からみる『集古十種』完成までの過程」

『古文化研究』一七、黒川古文化研究所

川見典久 二〇二一 「館藏品研究」伊勢国泊村出土大型銅鈴の関連資料』『古文化研究』二〇、黒川古文化研究所

清野謙次

一九四四 「古鈴に関する研究史」『日本人種論変遷史』第二卷第二篇、小山書店

清野利明・金野啓史

二〇〇九「寛元五年銘の「駅鈴」について」『民具マンスリー』四二―六、神奈川大学日本常民文化研究所

坂本太郎

一九二八 『上代駅制の研究』至文堂、のち『古代の駅と道』坂本太郎著作集第八卷（吉川弘文館、一九八九年）に再録

杉本つとむ

一九八五 『江戸の博物学者たち』青土社、二〇〇六年、講談社学術文庫にて再刊

杉本欣久

二〇一六 「江戸時代における古美術コレクションの一樣相―古鏡の収集と出土情報の伝達―」『古文化研究』一五、黒川古文化研究所

高橋善七

一九八六 「幻の大宰府駅鈴 由来記」『郵政考古紀要』一一、大阪郵政考古学会

滝川政次郎

一九六三 「駅鈴伝符考―隠岐駅鈴伝符の真偽―」地方史研究書編『出雲・隠岐』平凡社、一九八二年に原書房より増補版が刊行

詫間直樹

二〇〇三 「裏松固禪の著作活動について―『大内裏図考証』の編修過程を中心として―」『書陵部紀要』五五

田中 裕

二〇二〇 「編年的研究からみる金鈴・金銅鈴の歴史的意義」『金鈴塚古墳出土品再整理報告書』第二分冊 考察編、木更津市教育委員会

徳田武・横山邦治

一九九二『新日本古典文学大系八〇 繁野話 曲亭伝奇花釵児 催馬楽奇談 鳥辺山調絃』岩波書店

所 功

二〇一七 a 「光格天皇の『寛政新造内裏遷幸行列絵図』」『モラロジー研究』七九、モラロジー研究所

所 功

二〇一七 b 「史料紹介 徳島県立博物館所蔵『光格上皇修学院御幸儀仗図絵巻』―付論『光格天皇新造内裏遷幸絵図』解説の追補―」『モラロジー研究』八〇、モラロジー研究所

野村 玄 二〇〇八 「近世における太政官印再興の歴史的意義」大石学編『近世公文書論』岩田書院

野村 玄 二〇一七 「近世における天皇の地位と正統性―大刀契・劍璽・通過儀礼及び皇統の扱いに注目して―」『大阪大学大学院文学研究科紀要』五七

羽倉敬尚

一九六六 「懷徳堂師儒四家の系図」『懷徳』三七、のち鈴木淳編『近世学芸論考―羽倉敬尚論文集―』（明治書院、一九九二年）に再録

樋畑雪湖

一九三九 『日本駅鈴論』国際交通文化協会

藤田 覚

一九九四 『幕末の天皇』講談社

藤田 覚

一九九九 『近世政治史と天皇』吉川弘文館

藤田 覚

二〇一八 『光格天皇』ミネルヴァ書房

松田清・益満まを 二〇一九 「神田佐野文庫所蔵宇田川榕菴・辻蘭室筆「彩色ジャワ植物図譜」について」『神田外語大学日本研究所紀要』一一

馬淵一輝 二〇二一 「資料紹介」黒川古文化研究所所蔵の大型銅鈴』『古文化研究』二〇、黒川古文化研究所

三保忠夫 二〇一六 『鷹書の研究―宮内庁書陵部蔵本を中心に―』和泉書院

桃崎祐輔 二〇一四 「馬具からみた九州の地域間交流―船載馬具と国産規格品馬具に着目して―」『古墳時代の地域間交流二』第十七回九州前方後円墳研究会大分大会

桃崎祐輔 二〇一九 「額田部の馬具と鈴―心葉形十字文透鏡板付轡と虎頭鈴・多角形鈴をめぐる―」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集第二二集

森 哲也 一九九五 「律令制下の情報伝達について―飛駅を中心に―」『日本歴

史』五七一

- 森 哲也 二〇一九 「駅鈴と万葉集」『続日本紀研究』四一七
山下武夫 一九六五 「隠岐国駅鈴の閲覧調査覚え書」『郵和』九三、郵和会
山本四郎 一九六八 「辻蘭室伝研究―京都蘭学史上の先駆者―」有坂隆道編『日本洋学史の研究Ⅰ』創元社
弓削 繁 二〇〇三 「吉澤好道筆写本『六代勝事記』の出現」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』五二―一

図版出典一覧

- 図 1、24 E、24 I、34
新日本古典籍総合データベース (<https://korensaki.niji.ac.jp/>)
図 2 国立公文書館デジタルアーカイブ (<https://www.digital.archives.go.jp/>)
図 3、8、9、13、21、24 F、24 G、24 H、30、33、36
国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/>)
図 15、17、24 D、25、31
東京国立博物館デジタルライブラリー (<https://webarchives.tnm.jp/>)
図 23 高橋一九八六
図 35 国立歴史民俗博物館 khirin a
(<https://khirin-a.rekihaku.ac.jp/database/reitoukakushukocho>)

付記

本稿を成すにあたっての資料の複写・掲載に関しては、朝日町歴史資料館、京都大学総合図書館、京都大学文学研究科、宮内庁書陵部、国立国会図書館、天理大学附属天理図書館、新潟大学附属図書館、西尾市岩瀬文庫のご高配を賜りました。末筆ながらここに記して深く謝意を表します。